双子 in ネギま

ボタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双子　ｉｎ　ネギま

【Ｎコード】
Ｎ６４３１Ｔ

【作者名】
ボタン

【あらすじ】
ネギまの世界に転生する双子のお話です

プロローグ（前書き）

とりあえず、始めてしまいました（「◇」；）
適度に的確に適当に頑張って行きたいと思うので、応援してくださると、嬉しいです。

プロローグ

「え～と……どう言う事？」

「ごめん、分からないわ……」

辺りを見渡せば、そこは真っ白だった。

足元はフワフワしていて、それでいて程よい弾力がある。

小さくジャンプすると、まるでトランポリンで跳ねているかのように高くゆ～っくり跳び上がり、降下する時も、体が風船の様に緩やかに落ちて行く。

「はは、物理法則無視だね……」

「えぇ、地球にこんな場所なんか存在するのかしら……」

「現に今いるんだけどね……」

「そうなのよね……」

何故２人がここまで困惑しているかと言うと、真っ白で馬鹿広い見

知らぬ空間に気付いたら居たのである。
前触れなんかも全く無かった。
本当に気付いたら居たのである。
2人揃って……

「ねぇ、ここに来る直前の記憶ってある？」

「……覚えてないわ」

「そっか、ヤッパリ……」

質問の答えは予想がついて居た。
何故なら、聞いた本人にも無いからだ。
予想通りの答えを聞き、直ぐに思考にふけるが、それは直ぐに中断させられる事になる。

「ごめんなさい！！！！」

「……はぁ」

「……どなた？」

審査員が居たならば、間違いなく１００点を出すであろう程に華麗なジャンピング土下座をかましながら登場した明るめのパツ金女に唖然として、微妙な返事しか返せない２人。

少しだけ冷静になって絞り出した「どなた？」も声がうわずっていた。

「初めまして、神です！」

「……はぁ」

「……」

２人共、何のこっちゃ？　と、首を捻ってはいるが、この不思議空間にいる時点で「神」と言う可能性に蓋をする事は出来ないと感じてはいた。

「あなた達は柊劉（ひいらぎみづき）さんと、皐月（さつき）さんですよね！？」

「はい、僕が劉です」

「私が皐月よ」

何で自分達の名前を知っているんだ？　と言う疑問も浮かんだが、これまでの不思議現象のせいで、多少の事では驚きを見せなくなっ

た2人だったので、スグに軽い挨拶を返した。

「何で、あなた達がここに居るか……分かる？」

「全く」

「まず、何なのかしら？　ここ……」

皐月の問いに対して、僅かにピクリと反応した様に見えた自称神だが、その答えが今聞けるであろうから、スルーして返事を待った。

「え～と……天国……です」

「「……あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」

神の爆弾発言を聞いた瞬間に、今までのポーカーフェイスもガタ崩れして、叫びだす。

何か、思うところがあるのだろう。

「思い出した……」

「えぇ、私達……殺されたんだったわ……神に」

「あぁ、思い出されましたか……。はい、そうなんです」

2人共、今まで忘れて居た事実に一瞬だけ固まったが、先に回復した劉が疑問に感じた事を神に聞いた。

「それなんだけど、何で金髪神さんが謝ってるの？」

「えぇ、私達が殺されたのって、スキンヘッドグラサン神だった筈よ？」

「金髪神って……まぁ、良いです。はい、そのスキンヘッドグラサン神の話ですが、実のところ私の部下で御座いまして、彼は既に練りワサビ風呂72時間の刑に処されています」

「あぁ、そうなんだ、意外とチープな刑なんだね……」

「えぇ、人を殺しておいてその程度で住むのね……」

「まぁ、作者が放り込んだチープなギャグなので、スルーして頂くと嬉しいです。そ、そんな事より、本題に入らせて頂きたいのですが……」

「あぁ、ごめんなさい。どうぞ、説明お願いします」

こほんと軽い咳払いをして、劉と皐月を見据え、表情がキリリと締まった。

うん、こうなるとかなりの美人さんです。

今までの情け無い面しか見ていない2人にとってはかなり意外な様で、顔を凝視してしまっていた。

金髪神も金髪神で、何故自分の顔を見つめられている事に多少困惑したが、ここで突っ込んでは話が一向に進まないと判断して、スルーを決め込み、話を始めた。

〜劉〜

えと、こんにちは。

僕の名前は柊劉です。

皐月とは双子の兄妹という事になります。

えと、目が覚めたら不思議な真っ白空間に居て、皐月と軽い話をしてると、ジャンピング土下座で登場する自称神のパツ金女が現れて……もう、訳が全く分からない状態です。

ただ、その金髪神にたった今現状の説明をしてもらい、とうとう完全に理解しました。

まず、超がつく程簡単に説明してしまえば、殺されました。

神に……。

動機なのですが……嫉妬されたみたいです。

神に……。

いや、自分で言うのも何だと思うのですが、僕たち双子揃ってめちゃくちゃルックス良いんですよね……。

周りには、恋人と噂が出てしまうくらいに中も良いですし、事実も……割愛します。

家庭環境も最高で、父親はフランスで3つ星をもらえる程の超有名店の創始者で、お金ザックザク。

母親もゴッドハンドと名高い程に有名な整体師で、TVにも良く出てますし、外国でも相当名が売れていて【○ラッド・ピッド】さんや【○ャメロン・ディアス】さんなんかも常連さんらしいです。

すごいでしょ？　自分でも少し引くもん。

両親のお店に行くと、有名人のサイン何かが腐るほど出て来て、フリーズした事は良い思い出です。

これだけでも、嫉妬されるには充分過ぎると思のですが、極めつけにあり得ないほどの魔力？　と言う物を体に宿してる様で、そこも気に食わなかった様です。

僕と皐月2人揃ってね。

神様から嫉妬される程の魔力？　なので、恐らくは凄まじい物な

のでしょう。

実際金髪神も度々口にしていました、これ程の魔力量は神と呼ばれる私達の中に入っても、驚愕される程だと。

まぁ、褒められて少しは良い気にもなりましたが、もう死んでしまったのでぬか喜びだと少し気を落としていたところに、金髪神も心中を察したのでしょう。

余りに素晴らしい話を持ち出してくれました。

「あまり気を落とさないで？　今回のあなた達の死亡は本来予定に無い物。それに加えて、その原因は私達神側の管理不行き届きだったので、あなた達にはもう一度新しい生を与えたいと思うのですが、どうでしょうか？　私達の罪滅しの意味も込めて、是非受け取って頂きたいのですが」

皐月も一瞬硬直したが、嬉しそうな顔でスグに僕の顔を見つめてきた。

……うん、可愛い。

僕もスグ皐月に対して、頷きを返して金髪神にお願いした。

「はい、僕も皐月も新しく生きたいです」

僕の返事に金髪神もホッとした様な表情を見せ、細かい内容の説明をしてくれた。

「まず、新しく生きてもらうに当たって、あなた達には特典をつけようと思うの。まぁ、正直な所を話すと、あなた達に特典はもう要らない程のスペックはあるのだけどね……」

呆れた様な表情を見せ、また説明を開始する金髪神。

「そこで、あなた達には【不老不死】【魔力の更なる底上げ】の特典を与えますが、後は、あなた達から要望があれば、仰ってください」

「……凄いわね」

「うん、想像以上だった」

うん、特典って言うから、微々たる物なのかな？　何て、舐めてましたね。

不老不死って……

しかも、神に嫉妬される魔力を更に底上げしちゃうの？　と言うか、出来るの？　何て疑問があったので、素直にぶつけました。

「僕たちの魔力って、神様の中に入ってもすごい物なんですよね？
　それなのに、それ以上あげる事なんて出来るんですか？」

「鋭い所をつくわね……。はい、流石に神と言えど【自分以上の魔力を持つ者】など作り出す事は出来ません。精々自分よりも少し劣るか、同等の者を作り出す事が精一杯です。ので、そこで力をお借りするのです、ゼウス様に」

ん～と、ゼウスって確か神様達の王様だよね？　何でそんな人が僕達何かに力をくれるの？　それこそ、神側の管理不行き届きの罪滅しなのかもしれないな……。

なら、我儘言っちゃおうかな……神様の王なら、僕達の思いつく事は何でも出来るんだろうしね

「え～と、不老不死になれるのは嬉しいのですが、自分の見た目を年齢でコントロール出来る様にして欲しいです。それと、死ねないのは辛そうなので、死にたくなったら死ねる様にして頂きたいのですが」

「後、今まで聞くの忘れてたのだけど、私達が新しく生きる世界って今までの世界と同じなのかしら？」

あ、そっか。

僕達の生まれる場所って、今までの世界と変わっちゃうかもしれないよね……。

普通なら、今までの世界に送ってくれるんだろうけど、神様って時点で僕達と感覚が違ってそうだし。

「本来なら、あなた達の元の世界に送るのだけど、違う世界が良いなら、そこに送るわよ？　例えば、【〇ＮＥ　ＰＩＥＣＥ】や【〇リー・ポッター】【〇ニック・ザ・ヘッジホッグ】【ネギま】何かがどうかしら？　全部あなた方の部屋にあった物から選んだから、良いんじゃ無いかしら？」

「へぇ～、そういう事も出来るんですか」

「部屋なんか見られてるのね……」

「まぁ、神ですからその辺は分けないと言う事で流してください。ところで、どうでしょうか？　私としては、【〇リー・ポッター】か【ネギま】の世界が良いのでは無いでしょうか？　やはり、あなた方の１番の魅力はあふれる程の魔力の量だと思うのですが」

「皐月はどうする？　僕としては、【〇リー・ポッター】の世界はグロテスクで行きたく無いから【ネギま】の世界にしたいと思うんだけど」

「えぇ、同感だわ。私も【〇リー・ポッター】の世界は怖いから嫌ね」

「なら、【ネギま】の世界に送りますが、宜しいですか？」

「えぇ、お願いするわ」

「それと、お願いの話なのですが、今すぐには思いつかないので、後からって出来ますか？」

「あぁ、それなら心配はありません。ゼウス様ならあなた方の御要望くらいスグに分かりますから、わざわざ申告しなくても大丈夫ですよ？　あなた方も思い付かない様な深層心理レベルで叶えますので」

「ヤッパリ凄いんですね、ゼウスさんって……」

「でも、自分達以上に自分達の事を知られてるって少し怖いわね……」

「全知全能の神ですからね。では、一通り確認したい事は終わりましたので、ソロソロあなた方を送り出そうと思うのですが、何か質問など御座いますか？」

「いや、もう大丈夫です。こんな至れり尽くせりで、申し訳ないくらいですよ」

「いえいえ、元を正すと原因はこちら側にあるので、あなた方は何も気にせずに私達の厚意は受け取って置いてください」

「えぇ、分かったわ。ありがとうね」

「はい、どういたしまして。では、御二人を送り出しますので、目をつむっていて下さい」

「「はい」」

その後、目をつむっているのに眩し過ぎる程の光に包まれた瞬間、
僕達は意識を手放した……

プロローグ（後書き）

因みに、死因はスキンヘッドグラサン神の運転するトラックに追い回され、最終的に逃げ切れずにひかれてしまった（「◇」；）

こんな感じです。

何て適当な（^__^；）

1話　おっさんが面倒臭い……（前書き）

劉「やっと1話だね」

でも、今回もほぼ説明見たいなもんだから、あんまし面白くは無いと思うよ？

ネタもくっだらないし……

皐月「自覚してるなら、入れなきゃ良いのに……」

それでも、入れたいじゃないですか。

まぁ、こんな物でも楽しんでくれる人がいれば幸いですね

「無理やり纏めたでしょ」

ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！！！

1話　おっさんが面倒臭い……

「……皐月？」

「……劉？」

「「……おはようございます」」

ええと、皆さんこんにちは。

劉です。

「……森だよね？」

「……森ね」

はい、森に居ました。

前回のラストで、光に包まれながら気絶してしまい、目を覚ませば辺り一面は木、木、木。

そこに2人して横になっていました。

とりあえず、体に残る気だるさにうんざりしながらも、ゆっくりと立ち上がり、すぐさま隣の皐月に挨拶もしました。

森だという確認もしました。

まぁ、分かっては居たんですが、何かしら声を出したかったので、適当な話題になる事を口にしたんです。

「それにしても、金髪神さんは何て所に送ってくれたんだろ。何でこんなめんどくさそうな……」

「えぇ、全くだわ。……でも、街中とかに出されるよりはマシかしら？　想像もしたく無いわね、街中で眠る私達……」

「あぁ、うん。そうだね、そう考えると森が良い所に思えて来た」

「その街なんだけど、とりあえず場所くらいは把握したいから、少し詮索して見ない？」

「そうだね、まずはこの森を抜け出そうか」

「えぇ」

その後は、２人で外を目指して歩き回った。

危険な動物に合わないだけマシだけど、いいかげん足が疲れて来たし、何も食べてないからお腹が空いた感じがして気がきじゃない。

いやね、僕達一応だけど不死じゃない？

だから、多分だけどなにも食べなくても大丈夫何だろうけど、食事って物は１４年生きて来た生活サイクルにごく当然、ごく普通に取り込まれて居た訳で、イキナリ物を食べなくなる事に体が慣れて行く訳が無い。

しかも、僕達の親の料理の美味しさを知っていたら余計にね……。

だって、一食一食がレストランの味なんだもん。

食べること事態はそんなに好きでも無かったけど、それをど返しにしてしまう程に父親の料理は美味しかった。

そんな生活が当然だった僕達にとって、この環境は辛かったね。

いや～、金髪神は何を考えていらっしゃるのやら……ひ弱な現代人をこんな悪辣な所にポツンとほっぽって、無視を決め込んでしまっている。

呼べば出てくると思って呼び出して見た事もありましたが、反応なし。

精一杯張り上げた声も、多分な恥ずかしさを残してただ去って行ってしまった。

……うん、ただ大きな声を出すって恥ずかしいよね。

「……何かもう、諦める？」

「それも良い気がしてきたわ……」

「でも、どうする？　……そういえば、神様が僕達に能力をくれたって言うけど、一切その辺の話をして無いよね？」

「えぇ、でも神様が私達にくれた物って【不死】【魔力】【私達の望んだ物】だったわよね？　それなら、私達が望みそうな物を適当に試して見ないかしら？」

「それも考えたけど、分からないで出来るのかな？」

「何も分からなくて使える様にするくらいゼウスさんなら出来てもおかしく無いかも知れないし、試して見ても良いと思うんだけど？」

「……かもね」

う～ん……となると、何だろうね？　僕が望みそうな事……あれかな。

せ～の～で！！

びゅう！！　ごん！！

「ぅぶ！？」

「み、劉！？」

「……」

異常な速度で走り出した劉。走り出した本人でさえも、余りの速さに驚いていたら、気付けば近くの木に正面から衝突していた。情けなくも、仰向けに倒れて苦しんでいる。

「いった～……まさか、本当に出来るとは思わなかったや」

「……今のを痛いで済ます辺り、体は理不尽な程に丈夫見たいね。それで、今のは何の望みを試したの？」

「いやね、ソニック見たいに爽快に走れたら、凄く気持ち良いんだろうなぁ～……って、常日頃思ってたもので御座いまして。皐月にも話した事あったよね？」

「あったわね、そんな話をした事」

「いや～、凄い凄い。もう1つ目の力に気付いたか……」

「「ーー！？」」

2人の背後から急に聞こえた見知らぬ声に急いで振り返ってみると、髭面のおじさんが空中に浮いていた。

何か白い布で体を包み、感心した様な顔で僕を見下ろしていた。

「……どなた？」

「ん？　お～お～、忘れてた。おっす、おらゼウス！」

……何？　神様って変な人ばっかしなの？　さっきの金髪神だって、登場はジャンピング土下座だよ？　普通に現れてからの土下座で良いじゃない。

スキンヘッドグラサン神に至っては、人を殺す手口がトラックで撥ねるんだよ？　神様なら神通力とかで良いじゃ無い。何でトラックなのさ……。

それに、トラックで僕達を追い回す前に一度だけ現れてから「俺神だから！！　お前たち殺す！！」何でこんな宣言してからなのさ。一応の対策としては、僕達の記憶を消してはいたみたいだけど、結局はバレて今練りワサビ風呂に入ってるんでしょ？

もしかして、神様って凄く安っぽい存在なの？

「……どうも、劉です」

「皐月よ」

「うす、宜しくな！」

これが、全知全能なの？

寧ろバｋ……。

「ええと、何でゼウスさんが私達の前に？」

「お～お～、お前達に与えた【望んだ能力】の説明をしようと思ってな！」

「何で今更……。おかげで痛い思いしちゃったじゃ無いですか」

「あ～、気まぐれだ！。１つ目の力に気付くまで様子を見ようと思ってな！」

あ～、このテンションやかましいや……

「思ったより速かったな！　このゼウスおじさんも感心したぞ！」

あ、皐月もめんどくさそうにしてるや。

「はぁ、そうですか。それで、出来れば能力の説明を速くして欲しいのですが」

「お～お～、そうだったな！　まずはそうだな、今、劉君が使った力の説明するか！　気付いてるだろうが、ソニックのスピードをそのまま君に与えた！　因みに言うなら、最高速だと時速１２２５ｋｍだ！」

「へェ～、凄いや。それじゃあ、水の上を走るとかは余裕ですか？」

「余裕！」

「ついでに、ソニックって、条件付きだけど光速を超えるんですけど、僕も出来ますか？」

「無理！」

「まぁ、流石にそこまでは出来ませんか」

「まぁ、充分この世界じゃチートだ！」

「そうですね」

「私の力も知りたいのだけど、何があるのかしら？」

あ、ゼウスさんと絡むの面倒臭いカラって、今まで口を出さなかったな？

「お～お～、そうだな。皐月の力は大気を固める事だ！」

「あら、やっぱり。嬉しいわ、空中散歩してみたかったのよね♪」

「空中散歩どころか、深海散歩まで出来るぞ！」

「そうね、頑張れば宇宙散歩も出来そうね……」

「おう！　そうだな、後、お前等の他の望みは【人は殺したく無い】らしいからな！　相手に魔力を一切使えなくさせる事が出来るぞ！」

「ん？　一切って、一時的じゃ無くて一生？」

「ＹＥＳ！！」

「えと、どうやってかしら？」

「相手にお前等の魔力を供給させるんだ！　そうすると、【水を注がれ続けて、いつかは破裂する水風船】と同じ様に、相手の魔力を溜め込む部分を破壊する！！」

「それ、凄く良いね」

「でも、それ相応に魔力が必要なんじゃ無いの？」

「チッチッチッチッチ！！　お前等はゼウス様の魔力量を舐めてんじゃねぇか？」

「あ、そっか。僕達ってもともと多かった魔力を貴方に底上げしてもらってるんだった。でも、具体的に言うならどの程度の物なの？」

「この世界を作ったのは神だぜ？　そんでもって、お前等の魔力量は神の王である俺とほぼ同等！！　つまりを言うとだ、お前等はそれぞれ、この世界全ての魔力を足しても敵わない魔力を持っているんだぜ！！！　Ｙｅａｈ！！！」

何でだろ、このおっさんがドンドン鬱陶しくなってく。

ビックリマークも増えてるし……

「て事は、ぶっちゃけて仕舞うと世界中の人間が束になってやって来ても全員を無力化出来ると……凄すぎませんか？」

「いや！　どっちかってぇと、お前等の潜在能力が異常だった！！　正直魔力量に関して言うなら、おれはあまり増やしてねえ！！！　それだけに、お前等の魔力量は凄まじかった！！！！俺がやったのは、相手の魔力に干渉出来る様にしたくらいだ！！！！！」

「う～ん、私達の先祖に凄い魔法関係者が居たのかしら？」

「いや！　お前等の先祖に魔法の関係者は一切いなかった！！　言っちまえば、お前等は突然変異だな！！　まぁ、深く考えるな！！　ラッキーな事だぜ！！」

「それが原因で殺されても？」

「……ごめんだぜ！！！！！」

うん……これはテンションを落として言って欲しかった……

「まぁ、良いや。他にはどんな物が？」

「お前等2人とも共通の力として【毒】を与えた！　にしても、人を殺したく無いとか抜かす癖に毒とは恐ろしい双子だなおい！！」

「まぁ、神経毒とかなら死なないだろうし、自白剤とかも一種の毒見たいな物でしょ？」

「そうか！　毒を発生させるには、魔力をそのまま毒に変換させりゃ良いぜよ！！」

「良いですね。かなり便利そうです」

「他だと【どんな荷物も楽に持ち歩ける様に成りたい】【魔法界と旧世界を自由に行き来したい】【魔法を一切何もしなくても発動出来る様にしたい】何かがあったからな！　全部叶えた！！」

「……説明が面倒臭くなった？」

「おう！！　指が痛くなって来た！！！！！！」

「まぁ、とりあえず続きお願い……」

「おう！！　まず、お前等に渡す物がある！！！　コレだ！！！！」

そう言って、おもむろに懐から取り出した物を僕と皐月に渡したゼウス。

それを手にとって見てみると、僕のは青く輝いた石が着いた指輪。

皐月の物は、１００円玉サイズのリングに長い菱形のルビーの様な物が４つぶら下がったイヤリングだった。

「これは？」

「それはだな！　お前等の魔法媒体であり！！　倉庫であり！！！　転移装置である！！！！」

「多機能ね」

うん。

相当指が痛いんだね……

「まず！　お前等に渡したそれがあれば、どこにでも自由に行ける！！　近くにいる奴なら一緒に連れてもいける！！！　転移でな！！！　頭で場所を指定するだけで大丈夫だ！！！！　更に、某猫型ロボットの四次元ポケットの様な昨日も備わっていて、無尽蔵に物を収納出来るぞ！！！！！　普通に〇京タワーやら、〇カイツリーやら、〇メリカも収納出来る！！！！！！」

「最後のはチョット聞き捨てならないけど、面倒臭いからＮＯタッチね？　後、魔法媒体って言うのは？」

「おぅ！　それは、やりたい事を頭で考えるだけで、今渡した奴が読み取って魔法として発動されるぜ！！　チェケラ！！！」

……もう、良いや。

でも、神の口からチェケラは聞きたく無かったかな……

「後、私達何か武器が使える様になれたら、使いたいのだけど、その辺りのスキルはどうなってるのかしら？」

「お～お～！　どんな武器を使うにしても、空前絶後の才能をもたせたぜ！！」

「あなた、楽しんで無い？　私たちの改造を」

「当然！！　チート性能を作り出す事は、男の子達のロマンだ！！！」

「はぁ、もう良いよ……。後はある？　ソロソロ無くても全然構わないんだけど……」

「あ、もう良いのか！！？？　まだ、数え来れない程あｒ「遠慮します」……分かったぜ！！！」

この人ハート強すぎない？

心臓が毛虫みたいになってるんじゃ無いの？

「まぁ、能力の話はこの辺で良いとして、ココは何処なんです？」

「おぉ、そうだったな！　実を言うとこの場所は、未来に麻帆良学園が出来る場所だ！！」

「え？　でも、世界樹が無いよ？」

あんな大きな物が見つからない訳が無い。

でも、どれだけ辺りを見渡しても広がる密林しかない。

「あぁ、俺が隠してた！」

「はぁ！？」

「ほいっ！」

ゼウスが指を軽く回すと、出てきました。

世界樹が。

ええ、大きかったですよ？　初めてです、あそこまで荘厳とした木を見るのは。

多分認識阻害をかけてたんですね、僕達が森から抜けられないのも、何時の間にかゼウスにいじられてたんでしょうね。

「……何で隠してたんですか？」

「自分達の力を理解する方向に考えを誘導したかったから！　初めに世界し何か見たら、『きゃー！　もしかしたら、麻帆良かもぉ～♪　キャー！！』なんて風になっちゃうかと思ってな！！」

「……何で最初から教えてくれなかったのかしら？」

「そりゃ、暇つぶしにお前等の観察をしてたからだ！」

「あ～、もう何も言いません。僕たちがいるこの時間軸はいつ頃なんですか？」

麻帆良が無いあたりを考えると、１００以上前だろうな。

「お～！　エヴァが吸血鬼になった１時間後だ！！」

「……え？」

「いや、あれだ！　俺エヴァ好きじゃん！！」

「知りませんよ！　って事はあれですか？　今エヴァ苦しんでる所ですか！？」

「おう！　おもっくそ！！」

「貴方、周りに嫌われてない？」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　何を言ってるか分からないな！！」

「まぁ、良いや。どうせならエヴァと同行したいなとは思ってたので、可哀想だけど真祖にはなってもらうつもりでしたから……」

「おう！　その方が俺も楽しい！！」

「貴方はどうでも良いです。それと、もう一通りの説明は終わりましたか？　そろそろ疲れたんで、寝たいんですが」

「おぅ～……！　お前等、この短い時間で随分やさぐれてないか！？　まぁ、説明は終わりで良いだろ！！　眠いならその指輪かイヤリングから、家を出すと良い！！　一通り生活に必要な物はいれといた！！！！」

「あら、意外と気が利くのね」

「これでも、神だぜ！」

「「バイバイ」」

「……お前等が俺をどう思ってるか、ハッキリと分かったせ……」

「「バイバイ」」

「……じゃあな！！！」

泣きそうな表情をして、スッと消えて行ったゼウス。

少し可哀想だったかな……

まぁ、いっか。

「

1話　おっさんが面倒臭い……（後書き）

劉「最後のやっつけた感じが凄いね……」

皐月「そんなに指が痛かったのかしら？」

うん。

何か、カッチカッチになっちゃって……

「後回しにして、丁寧に仕上げるって選択肢は？」

だって、あげたかったんだもん……

ゼウス「分かるぜ！　その気持ち！！　心のウキウキが止まなくて、勢いだけになっちまった感じ！！！」

「「バイバイ」」

「……」

……頑張ろう？

「……おう」

2話　……また？（前書き）

どうも！　多分だけど今回の話で皆さんはうんざりするかもしれませんね……

皐月「何でそんな話を投稿するのかしら？」

いや～、私に物語を上手く構成する力が無いので……

「そう言えば、文章の書き方も安定しないわね」

ん～、試行錯誤中なのよね。色々書き方試し取るのよ

「そう」

そう言えば、今日からテストなので、投稿をいったん止めますね？

「唐突ね……。で、どうだったかしら？　今日のテストは」

……ノーコメントで

「……当然よね、テスト前に携帯弄ってこんなの書いてるんだもの」

……ごめんなさい

2話　……また？

「……どう思う？」

「やり過ぎ」

「……だよね」

あ、こんにちは。

劉です。

まず、何の会話か検討もつかないよね？　少しだけ、遡って説明します。

◆

僕達に与えた力の説明をしてくれて、更に生活するのに必要だろうと思われる物まで準備してくれた親切で規格外に鬱陶しいゼウスを問答無用で返した後、鬱蒼と生い茂る森に2人立ち尽くす僕達。

何故かドッと実感した疲れに目眩を覚えて、早くフカフカのベッド

にバタンしてキューしたいなと思っていたので、即座に家を出す事にしました。

「多分頭に思い浮かべるだけで出て来てくれるよね？」

「多分ね。無駄に親切な人……かm……おじさんだったから、その辺は私達の思う様になると思うわ」

「ははは……」

さて、取り合えずは簡単に念じてみようかな？　具体的な家のイメージをイキナリ思い浮かべろなんて無理な話だしね。

そこで、目を瞑って集中する劉。皐月はそんな劉を見て、家が出てきてくれるのを黙って待っている。

目を瞑って5秒程だろうか？　劉が少しだけ深呼吸の様な深目の呼吸をしだした。

実際、何も気負う事など無いのだろうが、これからの安眠がかかっていると思うと自然と不安に駆られてしまうのだ。

さぁ、そろそろいくかな……

家よ出てきて！

ーーにゅにゅ～ん

にゅにゅ〜ん……こんな擬音がピッタリな登場の仕方で劉の指輪から出て来た物は、赤い屋根の立派なログハウスだった。

にゅにゅ〜ん……うん。某猫型ロボット◯ラエモンの四次元から出てくる道具を想像してくれれば、簡単に想像がつくのではないでしょうか。

指輪から出てきた部分から、元の大きさに戻ってゆく様は、何処か◯ンクの叫◯を思い出させます。

ん？　1ミリも思わねえよって？

……ん〜、感性の違いって事でお願い♪

「出てきたね……」

「えぇ、良かったわ。流石に野宿は勘弁したかったからね」

「そうだね、今の所何も無いけどココは森の中だしね」

「もしかしたら、これもゼウスのおかげだったりするのかしら」

「あの人なら、何処までお節介を焼いてくれてるかが分からないよね」

「基本は良い人なのにね。絶対損してるわ、あのテンションは……」

「ははは、うん。良い人だし楽しいんだけど、疲れるよね……」

軽いゼウス談笑をいれ、どちらとも無くログハウスに視線を向けると、もう片方もつられる様にログハウスへ目をやる。

大きさは普通の一軒家と呼べるサイズで、劉と皐月だけならば丁度良く快適に過ごせるであろう物だ。

うん。やっぱり、自然の中だとログハウスが1番映えるね……あれ？

「ねぇ、ゼウスは家と必要最低限な物しかいれてないって言ってたよね？」

「えぇ、それが？」

「もしかしたらなんだけど、この家って最初から入ってた訳じゃ無いのかもしれない」

「……そうね。ただ、あくまでかもね」

入っていた物が何故ログハウスだったのか。

それこそ、普通だったら1番メジャーな家のはずだと思う。

でも、出てきた物はログハウスだった。

森の中で家をだしたから単純にログハウスになっただけかもしれな

いけど、それでも疑問視しても良いとは思う。

もう少し情報が無いと、今はどうのこうの言えないから保留にしておく事にしよう。

とにかく、今は寝る事が1番大事！！

うん、頭を正常に働かせるためには寝ないとね！！

大事！！　生活ペース！！

……ゼウスさんの影響受けたかもしれない……

◆◆◆

「……おはようございます」

「おはようございます」

あ、皆さんもおはようございます。

ただいま朝でございます。

あの後、ログハウスに入って軽く中を見たらすぐに寝てしまいました。

ベッドを見たら、睡魔が物凄い事になったので、欲望のままに寝てしまいました。

……同じベッドね？

ま、余談は良いとして、家の中身なんですが普通でしたね。

皆さんがモデルルームの中を見学させてもらった時の感じです。

内装は至って普通。

まさに、現代日本のログハウスを５９９年と３６４日と２３時間前にボンっと持ってきただけです。

木で出来たテーブルにヒノキ風呂、普通のキッチンにペレットストーブ。

どれも特別な物はありませんでした。

ただ、キッチンとペレットストーブには少し興奮しましたね！

特にペレットストーブです！

柄にも無くはしゃいでしまい、ペレットストーブを使って見たのですが、家の中の熱気が凄い事になってしまいました。

忘れていたんですよね、火を付けてたの……。

普通に消せば良かったのですが、ベッドに倒れこんだ後に思い出した物ですから（正確には、暑いと感じてしばらくしてから思い出し

た）処理が遅れてしまいましてね……凄かったですよ？　ペレット君の真正面は……

皆さんも、ノリと勢いには気をつけてね……。

「ねぇ、ゼウスさんから貰った力の事なんだけど、少しだけためしたい事があるんだ」

「……何かしら？」

「僕の指輪と皐月のイヤリングの事」

「そうね、私も試したい事があったから丁度良いわ」

「それじゃ、３０分後位で良いかな」

「えぇ、大丈夫よ」

◆◆◆

あれから、お風呂に入って歯を磨いて少しだけマッタリとしたらすぐに僕達はログハウスの外に出ました。

あ、余談なんだけどヒノキ風呂って凄いね！

香ること香ること。

隣にいたさつk……凄く良い匂いでした！！！

あ、更に余談だけど、何で森の中でログハウスが建ってられるかと言うと僕も詳しくは分かりませんが、木がなくなるんですよね。

いや、本当に無くなる訳では無いんですが、なんと言うか地面に溶け込むようにして真っ平らになっていて、ログハウスの邪魔にならない様になってくれています。

ゼウスさんさんですね！

様ではありません、決して。

「さて、早速試してみようか」

「どっちからやる？」

「僕からやるよ」

さ、どうなるかな……出てきてログハウス！

ーーにゅにゅ～ん

「やっぱり、出たね」

「えぇ、だとしたらこの指輪とイヤリングの力はただの倉庫じゃないって事になりそうね」

僕がだした物は、初めにだしたログハウスと全く同じ物。

内装や木目まで全てが同じです。

「そうだね、多分だけど【イメージを具現化】出来るのかな？」

全く同じログハウスを2つもいれる必要が全く無いですからね。

僕と皐月で1つずつと考えても、僕の指輪に2ついれるのは変な話ですしね。

「いや～、鋭いなとは思ってたけどここまで早く気付くとは思わなかった……」

僕と皐月の後方で昨日嫌というほど聞いた声が現れた。

今度は焦る事はせずに、盛大なため息を吐きながらその声の主の方向へ体を向ける。

「今度は何ですか、ゼウちん……？」

「うす、おはよう！　いやな、お前等が倉庫の力に気付き始めた見たいだから、説明をだな！！」

（何でゼウちんに反応せずにいられるのかしら……）

「それよりも！　ため息は行けない！！　幸せが光速で逃げて行くぞ！！！」

「いや、幸せが逃げたからため息が出るんです……。まぁ、そんな事はどうでも良いので、説明してくれませんか？　好い加減読者(みんな)も説明に次ぐ説明にうんざりしてる筈ですから、とっとと済ませて下さいね？　何より作者のボタンが……」

「おう！　そうだな！！　俺も再放送の【〇丹と薔薇】は見逃したく無いからな！！！　ぶっちゃけ劉の言った力で８割合ってる！！！！」

「後の２割は何なのかしら？」

「それはな、実際に見た物では無いと具現化出来ないってとこだ！　だから、〇立の炊飯器が具現化できてもパ〇ソニックの炊飯器は具現化出来ない可能性なんかがある！！　そんな所だな！！！」

ん～、その説明あってる様なあってないような……凄く微妙だね。

「えと、例えばパンフレットを見ただけでも具現化は出来るんですか？」

「お～お～！　可能だぜ！！　だがな、漫画なんかの特有の道具を具現化する事は不可能だ！！！　簡単に言えば【〇ンダム】や【〇ームサーベル】なんかは無理！！！！　あくまで実在する物限定！！！！！」

「それにしても、随分と便利な力だね……。僕達はもう良いって言ったのに」

「まぁ、あれだ、暇を持て余した神々の遊びだ！　ついでに言うなら、お前等は気付いてないだけでまだ力は与えてるぜ！！　当然ながら拒否権無し！！！」

「何か気持ち悪いわね……自分達にとって良い事の筈なのに、理不尽さのせいで嬉しさを感じないわ……」

「うん。同意するよ……」

「おっと、そうだ！　お前達の指輪とイヤリングには俺からちょっとした贈り物をするぜ！！」

そう言うと、自分の纏っている何処か神聖さを漂わせる白い布から真っ白の指輪を取り出した。

「それは？」

「これはな、ダイオラマ魔法球に入った時限定で老化を止める効果がある指輪だ！」

「へぇ～、助かるわ、私達の気づかない所をカバーしてくれるのは」

「僕達はそれをもう見たから、自分達でその指輪を取り出せるんだよね？」

「そう言う事！　好きだぜ！！　呑み込みの早い奴は！！！」

「ダイオラマ魔法球は？」

「……６００年近く原作まで期間があるのに、必要か？　エヴァたんのでも見れば良いだろ！」

「それもそうね」

「……他に何か説明したい事ありますか？　そろそろ何かしらの行動を起こしたいんですよね」

「あ～……んじゃ、もう良いか！　今回出て来たのもお前等が倉庫の力に気付いたからだったしな！！」

「「バイバイ」」

「バイバイ！」

「「（適応した！？）」」

◆◆◆

ゼウスさんが帰った後、僕達は話し合いによってエヴァンジェリンを探す事にしました。

と、言ってもエヴァンジェリンの過去の情報は皆無に等しいので、雲をつかむ様な話である事はわかっています。

ので、あくまでついでです。

原作でも、この時代の描写はほぼ無しですから、この時代がどの様な状況なのかも分かりません。

ですので、正直に言って仕舞うと行動を起こそうにも何をすれば良いのか検討もつかないので、普通に生活しようかなと思ってます。

まず、魔法世界まで行き、お店を経営します。

整体兼フランス料理店を起こすことにしました。店の名前は分かりやすく「ヒイラギ」にしようと思っています。主に僕が整体を、皐月が料理を担当して、従業員は雇わない予定です。倉庫のおかげで、お金の元出は一切ないので、いくら儲けが出なくても良いのが凄く気楽で良いでしょ？　軽い趣味感覚でやって行けますしね？

ただ、裏では賞金稼ぎもやって行きます。

やっぱり、大きな力があるので有効活用したいよね。それに、僕達が賞金稼ぎとして名前を売れば、エヴァと会える可能性も高くなるし。

まぁ～……何百年単位になっちゃうと思うけど、気長に行こうと思う。

言ってしまえば、原作が始まる頃にエヴァと接触出来てれば良いんだしね。最悪接触無しでも麻帆良で友達なれたら良いかな……。

……いつも悩むんだけど、占める時はなに書けば良いんだろ？

2話　……また？（後書き）

これで、やっと普通に物語を進める事が出来ますよ

劉「お疲れ様だね」

ありがとうね。普通にねぎらってくれるのが今は1番嬉しいよ。

ーーー

皐月「アレを1人で書いてるのよね？」

ゼウス「あぁ！　ベッドの上でもくもくとな！」

「……悲しくなってくるわね」

ーーいや～、本当に疲れたでしょ？

「もう、泣きそうだ……」

ーーいやいや、それ程でも無いよ！

「「……哀れね（だ）」」

3話　学園（前書き）

いや～、おっさしぶりでございます！

劉「や、テストどうだった？」

終わったよ～、再試含めてねー。

皐月「結果は？」

……そういう遠慮と配慮の無い子嫌い！！

「あらあら、予想通りね」

「うん、テストの結果を親に見せるのが怖くて、病人見たいな顔してたしね……」

こってり絞られたしね……

分かるんだ……

親の愛情だってのも分かるんだ……

でも、理解出来るのと実行出来るのとは別問題だ！！

「「……最低」」

3話　学園

ーー始めて見る料理だけど、信じられないくらい見た目が良くて美味しいかった

ーーあそこでマッサージをして貰うと、今まで体内に重りを付けていたのでは無いかと錯覚する程体が軽くなる

ーー心の底から満足できる内容の料理とマッサージだったのに、お値段が善良的で気軽に通う事が出来る

ーー始めて見る食材や、味付けであった。新しい料理の可能性が開かれた事を感じたよ

「端的に言いますね？　うちで働く気は無い？」

「どうする？　僕は別に良いかなって思うんだけど？」

「店舗ごと持っていくので良いんじゃ無いかしら？」

どうも、こんにちは。

ミヅキです！

ーーっ？　　片仮名？　　気分だよ、ははははは！！

皆さんも周りの人からの影響は気を付けて下さいね！

あの、ゼなんたらって人と数回話したら、たまに口調がおかしくなる様になりました！　　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！　　いや～、治したい（泣）

まぁ、そんな事は角にほっぽいて置いて良いでしょう。

今がどんな状況か軽く説明しますと、スカウトされました。

えっとね、１年前にアリアドネーでお店を開きましてね？　　これが凄い繁盛しちゃって、アリアドネーで知らぬ者はいないとまで言われる程にまで有名になってしまいました。

う～ん、細々とした暇な幸生活を送る予定だったんですけどね～……

まぁ、自業自得かな？　　両親から一通りの料理とマッサージの技術は教えてもらって免許皆伝とも言われましたんで、僕達もゴッドハンドと三ツ星料理店の腕前は持ってますからね。

さらに、ここは約６００年も前の世界ですので、この時代には無い味付けや食材に、ツボや機材を駆使してますからね！

店内にはリクライニングチェアーがドッシリと君臨しております。

怪しまれるかもしれないからやめようとも思いましたが、そこはアレですよ……あれ、その場のテンションですよ。

そんなこんなで、僕達のお店は色々な有名人の御用達となりました。
例を挙げるなら、この学園都市アリアドネーの総長さんなんかも月に2度は来ます。
後、世界的に有名なマギステル・マギであるらしい方も度々やって来ます。
今や、アリアドネー名所の筆頭になってしまいました。
ただ、所詮は僕と皐月の2人だけでやりとりしているので、そんな客の数を捌けるのかと言われると物理的に不可能なので、ダイオラマ魔法球を使用しています。
ちょっとゼなんちゃらに相談したら直ぐにくれました。
時間は魔法球内で過ごした1時間を現実時間の5分にまで圧縮した物ですね。
御客さんにはダイオラマ魔法球にいる自覚が無いと言う便利すぎる物なので、したく無い感謝をして仕舞いました。
たまに、鋭い魔法使いにはバレる事がありますが、そこは僕達の気化させた毒を脳内に送り込んで、正常な判断力を奪ってかつ、軽い記憶障害を起こさせて頂きました。
害はありませんよ？　食事をしてマッサージを受けた記憶は残っていますし、何か副作用がおこらないこともゼなんちゃらに確認してます。

最初は苦労しました、送り込む量によって奪う記憶の量が変わるので丁度良いさじ加減を知るまで僕の身体を使って実験しまくりました。

今でも、当時の事は思い出せません。

◆◆◆

えと、スカウトの話に戻るんですが、僕達の御得意さんだった方がお店に入って来て、いつも通り席に案内しようかと思った矢先に突然あんな事を言われたんです。

名前はメレスさん。

学園都市アリアドネー騎士団候補学校の総長さんです。

長い腰まである金髪に頭から生えた2本の太い角をこしらえた美人さんです。

イキナリのスカウトに悩む事なく「良いんじゃ無い？」的な雰囲気を出す僕達に軽く驚いたのか、一瞬だけ呆けた表情をしましたが、好感触だと思ったんでしょうね、すぐ口角をつり上げました。

「ん～、でも、何で？　　僕達は料理とマッサージしか出来ないよ

？」

「それが良いのよ。名前から分かる通り、学園都市なのよ？　中には論文を仕上げる為に机に向かいっぱなしだったり、学校の勉強について行く為に机に向かいっぱなしの生活が当たり前の様な人が蔓延してるの」

「なるほどね、そこで私達ね？」

「そ、うちの職員達もここ【ヒイラギ】を利用させて貰った後は目に見えてストレスも疲れも吹き飛んでるのよ。当然あたしもね？　それに、肌ツヤツヤだし小顔になってるし……。こちら側にして見たら、一石三鳥くらいあるのよ」

「そこまで、言ってくれると流石に照れますね」

「ま、良いんじゃない？　別に悩む事も無いと思うわよ？」

「そうだね、別にどうなろうと僕は良いし」

◆◆◆

～メレス～

初めは、うちの職員の1人が話題になっている【ヒイラギ】行って来た事が始まりだった。

あたしが1人で書類に目を通していた時に、ドタバタとした足音が廊下に響き、あたしの部屋にまで音がとどいていた。

流石にここまでの足音は見逃せる物ではなく、気怠い身体を持ち上げようとしたその時ーー

バァーン！！

部屋の扉が壊れんばかりの音を立てながら勢いよく開かれ、うちの学校では1番新しく入って来た若い女教師が入って来た。

「トア！　一体何事でs「総長！！」か……？」

つい、彼女の怯えた様な、興奮した様な迫力のある声に押されて何も言えなくなってしまって、彼女の顔を呆然と見つめてしまった。

彼女が言うには、【ヒイラギ】を経営している劉と皐月と言う2人の魔力保有量が以上なのだそうだ。

歴代の英雄と言われたもの達さえも凌駕する程と言うのだが、正直信憑性は無い。

言葉が大げさ過ぎて勢いだけにしか感じられない。

でも、トアの様子から見てただ事では無い事は充分すぎる程に分かったあたしは、明日【ヒイラギ】に行く事を決めた。

◆◆◆

あたしは今、【ヒイラギ】の前にいます。

トアの様子からを見て、今日ココにくる事を決めましたが、既に後悔した様な気分になって仕舞いました。

魔力を全く感じられないのです。

トアが言うには、魔力は垂れ流しの状態であった事からどうやら素人であるらしいと思っていたのですが、素人ならば店の前に来た時点で垂れ流しの魔力を察知する事が出来る筈だし、もしも魔力を隠す事が出来ていたとしても、トアにわざわざ見せ付ける必要性を全く感じられない。

「ま、悩んでても仕方ないか。今日は休暇気分で疲れを取るとしようかな」

例えトアの見当違いだとしても、ココは今1番話題の御店だしと気軽にドアを開け、一歩を踏み出した瞬間ーー

ゾクッ

「「いらっしゃいませ！」」

奥から出て来た可愛らしい2人の子供と、えげつない程の魔力……

（あ、あり得ない……）

何度か龍樹（ナーガシャ）を見る機会があって、その余りの荘厳さに身を震わせたものだけど、それさえも嘲笑うかの様な絶対的な魔力ーー

にこやかに笑いかけてくる顔さえも、何処か化物を見てる様な気を起こしてしまう。

ここまでに規格外な魔力を垂れ流しにしていながら何故普通に生きて居られるの！？

この膨大な魔力を利用しようとする輩が現れないわけが無いと思うのだけど……

この子達何かあるの？

「えと、どうされました？」

あたしが呆然として固まっていたのを心配した様な声色で問いかけて来た男の子。

その少し困惑した様子で見つめているので、すぐに「ごめんなさい、思ったより若い子達で驚いただけよ」と、適当な言葉で代用して安心させて置いた。

◆◆◆

その後の事は良く覚えていない。

最初の魔力の膨大さにやられて心ここにあらずな状態で、気付けば料理を食べてマッサージも受け終わり、学園に帰って来ていた。

唯一覚えていたのが、膨大過ぎる魔力の衝撃だけ。

後、身体の軽さを考えれば相当に効果のあるものだったのだろうと言うことをバク然と思うだけだった。

それから、あたしは【ヒイラギ】の常連となって2人の様子を度々見に行く様になった。

聞いた話だと、2人は魔法の知識は全く無く唯の素人らしい。

余りに惜しい人材なので、様子を見ていつか魔法使いとして育てたいと思ったけど、今の2人の仕事してる時の楽しそうな表情と話題になり出したこの【ヒイラギ】の現状を考えれば、野暮な気がして今度の機会に送ることにしました。

それに、空前絶後な魔力量を除けば、唯の優しいくて可愛らしい双子だった事もその考えを後押ししたのかもしれない。

ただ、そうも言っては居られないとも感じてはいた。

この2人の事を狙い出すもの達は必ず現れるだろう事から、自衛出来るだけの力の使い方だけでも最低限教えてあげないといけない。

何故だか分からないけど、この2人の情報はほとんどで回って居ないから、すぐにどうこうなる事ではないと思うけど、こんな不確定な話は信じるに値しないので、結局は近い内に話を持ち出してみようと思う。

まぁ、この2人がどう化けるのかが知りたいだけなのも少なからずあってしまうのも事実ですがね……。

◆◆◆

〜皐月〜

どうも、皐月よ。

私視点で話を進めるのが初めてだから、少し緊張してるわ。

ま、どうでも良いわね。

メレスさんの勧誘を受けてから私達は学園に通う様になったわ。

生徒としてね。

放課後は普通に【ヒイラギ】を経営しているのだけど、流石に魔法は学んだ方が良いと説得されて、私達もそれに納得した形ね。

初めての授業（1年生の授業に途中から混ぜてもらう形になった）では、初心者用のチープな杖で火を灯したら、魔力のコントロールを知らなかったせいで、勢いよ過ぎて天井を焼いて仕舞い、大きな焦げ跡を作ってしまって驚いたわ……。

決して低くなかったのよ？　寧ろ日本の学校では考えられない位高い天井で5～6mはあったのよ？　ビックリしたわ。

目の前で燃え上がる大きく太い火柱から伝わる熱のせいで、顔が2～3日はヒリヒリしたままだし、クラスメイトからの尊敬の視線が付き纏うしで、落ち着かなくて大変だったわ。

多分、これだけで攻撃魔法として充分成立するわね……。

後から聞いた話だけど、あそこまで大きな火を灯したのはどれだけ過去に遡っても私達だけらしくて、裏では将来の大魔法使い確実視されているみたいだったわ。

クラスメイト達との付き合いもうまくいってるとおもうわ。

皆私達が【ヒイラギ】の経営者だって事を知っていて、よくお店にも来てくれるから少しサービスなんかもしてあげて私達の好感度は凄く高い。

後、私達の容姿が共に学園一と言うのは、周知の事実見たいになっているけど、常に2人一緒にいるからお互いに告白されるなんて事は一切無いのよね。

面倒じゃなくて良いんだけどね。

劉に関していえば、女の子の事を恋愛対象で一切見ないから、私が最初に忠告してあげてるのもあるのかも知れないわね。

劉は凄く女好きだけど、あくまで友達限定。

男友達と付き合うよりも女の子友達といる方が楽しいと常々言ってるし。

成績は、最初の頃は酷いもの（途中参加だった為）だったけど、最近だと私達が道立首位が当たり前な状態。

スッカリ天才と言われるのも慣れてしまったわ。

まさに、スポンジが水を吸う勢い並に物事を覚えて行ったわね。

先生方からの評価も概ね良好。

角の立つ様な事は一切起こさず、態度は宜しく、更には【ヒイラギ】での効果で疲れを吹き飛ばしてもらう。

こんな状態だからね、本当に先生方からは好かれているわ。

私達自身も、先生と話す事は楽しいから凄く学校生活は充実しているわ。

それと【ヒイラギ】の経営なのだけども、学内のお客さんだけじゃなくて、今まで通り一般のお客さんも受け付けてるから、店内は前と変わらず大忙しだったりするの。

そろそろ、人を増やしたらどうなんだとよく言われるけどハッキリ言って仕舞うなら【ヒイラギ】を支えている物は新しい食材でも、最新鋭機材（この時代に機材を出してる時点で最新鋭も何も無い気がするけどね）でもなく、私達の確立された確かな技術なの。

それに、コダワリなのかしらね。

素人を雇って、形だけの適当な事はやりたく無いの。

だから、どんなに忙しくても私達はずっと2人でやって行くと思うわ。

3話　学園（後書き）

劉「相変わらず、話の締め方が分からないみたいだね」

皐月「内容も良いとは言い難いけどね」

……

「黙っちゃったね……」

「拗ねられても、事実は事実よ」

……

「……何か最近皐月性格キツくなってない？」

「今までの話の私の影の薄さを思い出したら、少しイラついちゃってね」

……

「あ～、確かについで見たいな感じだったかも」

「どうしても、1人に集中しちゃうらしいわ」

……

「原因聞いてたんだ」

「えぇ、脅したらアッサリ吐いたわ」

……

（あれ、皐月ってこんなに黒かったっけ……）

……ぷぷ

「ん？」

……落ち思いつかないから締めるわ。

「えっ！？　そんな勝ってなこ

劉　紹介（前書き）

劉「何で今更キャラ紹介？」

最初は載せる気無かったんだけどねー。あった方が良いかもって急に思った物でございまして。

皐月「もう少し、計画性を持ったらどうなの？　タ〇リさんも言ってるじゃない」

行き当たりばったりこそ、志向でござるよ。

「それで、自分の首を締めるのにね」

うん、いざ締まったらどうしよう？

「更新停止して逃げるのはどうかしら？」

それは……

「じゃあ、退会して小説ごと消すのはどう？」

ーーごめん、もういいです……

「あら、そう？　残念だわ」

そんな事を笑いながら言わないで下さいよ……

あはははは

クスクス

……シクシク

劉　紹介

名前
柊劉（ひいらぎ　みづき）

年齢
１４歳

好きな物
・皐月
・暇（雲を見ているだけでも、１日を難なく過ごせる）
・チリドッグ（〇ニックの大好物と言う事で憧れとして食べているが、辛い物自体は大の苦手で、涙目になりながら食べている）
・猫
・読書
・久保〇利伸
・女

嫌いな物
・辛い物（チリドッグ除く）
・理不尽
・しつこい人

能力
・時速１２２５ｋｍで疾走可能
・魔力を毒に変換させる事が出来る【皐月も同じ能力を有する】

・相手の魔力に自分達の魔力を強制的に供給させる事が出来、魔力貯蔵量の限界を超えた相手は今後一切魔力を自分で精製する事ができなくなる為、魔法を使用する事ができなくなってしまう。【皐月の同じ能力を有する】

・その他【ゼウスが気紛れで能力を追加して行く為、本人でさえ把握はできて居ない（皐月も同様）】

性格

・基本的には優しい性格の為、周りからは非常に好まれる様で、学校にいる間は人に囲まれている状態も珍しくはなかった。

・馬鹿みたいに気が長く、相手が待ち合わせに2時間遅れて来たとしても待ったという感覚は全く無い。

・非常に柔軟な思考を持っており、どんな物事にもアッサリと適応してしまう。

・危機感が余りにも低く、目の前で拳銃を突きつけられたとしても、恐怖の感情は生まれない。

・ゼウスの影響で時折、ファンキーな口調になる事がある。

・基本的にはフランス料理が得意ではあるが、多方面の料理に手を出している為、どんなジャンルの料理だろうと完璧に作り上げる（ただし、フランス料理と比較すると多少は劣ってしまう）。

・料理の腕は皐月の方が若干上で、マッサージは劉の方が上である（ただし、お互いに腕前自体は最高峰のそれであり、多少の優劣はあれど目に見える程の物は無い）。

・非常に女好きな性格であるが、あくまで友達としてであり、恋愛対象として見る事は無い。相手にも、下心が無い事が伝わるので、非常に良好な関係を気づく事が出来る。

劉　紹介（後書き）

皐月「ねぇ、この前書きと後書きのくだらない茶番は必要なのかしら？」

いや、皆様に満足してもらうと言うよりは、完全に自分がやりたいからやっとるだけやしね～

劉「完全な自己満足って事だね。やめたら？　こんな滑るだけの恥ずかしい事」

それ言っちゃったら、この小説自体が……

「ま、そだね」

出来れば自己満足だけで終わらせたくは無いけどね

「貴方次第ね」

まぁ、マイペースにやってきますよー

皐月　紹介（前書き）

皐月「そう言えば、私の名前の由来って何なのかしら？」

イキナリどったの？

「いえ、皐月（さつき）に劉（みづき）って言うあからさまに狙った名前が気になったのよ」

この前ね、ＴＶを付けてたんだ、そしたらね、たまたま掛かったＣＭが目に付いてそこからとったのです！

「……それ、何のＣＭか教えくれるかしら？」

競馬！！！

「……皐月賞ね」

Ｙｅｓ！！！

大丈夫！　自覚してる！！

「……面倒だから、もう良いわ」

えっ！？　そこで、引いちゃうの！？　いや、もう少し付き合ってくれるとおも【バイバイ】っ……。

シクシク……

皐月　紹介

名前
柊皐月（ひいらぎさつき）

年齢
１４歳

好きな物
・劉
・暇
・劉のマッサージ
・猫
・ペンギン
・霧
・風呂
・早朝散歩（劉を半強制的に突き合わせるが、劉もまんざらでは無い）
・アイス
・世界中の絶景（これも、劉を半強制的に付き合わせるが、劉もまんざらでは無い）

嫌いな物
・理不尽
・しつこい人

能力

・空気を固定する事が出来る（固定した空気を足元に固めて、空中散歩をする事も可能）。

・その他【ゼウスが気紛れで追加していくので、本人も把握はできて居ない】

性格

・基本的には自発的に話す事はあまりなく、クラスに居ても、ほとんど黙っているが、話しかけると普通ににこやかにしてくれる為、周りからの人気は高かった（クール・ビューティー）。

・たまたま早朝に目が覚めて、外に霧がかかっていると劉を起こして散歩に付き合わせる。

・ＴＶ等で、たまたま目に付いた絶景があると、劉を付き合わせてその週末突発的に家を飛び出す事がしばしばある（今の所、１番のお気に入りはオーストラリアのモンキー・ポッド）。

・相手がどんなにお偉い様でも、ふだんの口調を崩す事は無いが、相手にそれを咎められる事は何故か全く無い。

・基本は優しい正確なのだが、口調に少しだけトゲがある（意図しての事なので、全く無くす事も出来る【ただ、相手を傷つける事はよほどの事が無い限り言う事は無い】）。

・常に冷静で、ポーカーフェイスを崩す事はほぼ無いが、劉と２人きりの時は普通に感情を表に出す（例え隠したとしても、劉には感情の微妙な揺れが全てばれて仕舞う）。

・時折、シャレにならないジョークを言う。

皐月　紹介（後書き）

劉「僕の名前って、皐月を少し変えただけだよね？」

うん

「……そっか」

……うん

「……」

……ごめん、お前も元は皐月賞だ……

ゼウスを紹介（前書き）

劉「ゼウスの説明必要だった？」

ーーいや、何となくでしか無いね！

皐月「あなたが何となくを言い出して良い方向に進む事って極々稀な気がするのだけど？」

ーー良いじゃない！　行き当たりばったりには、無限の可能性が宿っているんだ！！　ハズレくじが多いだけで……

「あぁ、残った少ないお金をギャンブルにつぎ込んで後悔するタイプでしょ」

ーーいや、学生だし

「あなたにクールダウンされると気持ち悪いわね……」

ーー……ふふふ、皐月は人の心を抉るのが上手いなぁ

「いえ、あなたの抉る場所が多いだけよ」

ーー……ふふふふ、帰るよ……

「いじけたね」

「えぇ」

ーーふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふはふふふふふふ
ふふ

ゼウスを紹介

名前
ゼウス

年齢
不明

好きな物
・暇を潰せる物
・柊兄妹
・部下
・漫画
・ゲーム
・信仰論者
・エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

嫌いな物
・暇
・つまらない物
・無神論時

能力
・何でも出来る【人間が想像や知覚も出来ない事も悠々とやってのける】

性格

・とにかく楽観的

・とにかくファンキー

・とにかく有能

・柊兄妹は既に親友として認識している【ベタベタだが、ゼウスに対して自然体でいる者は今まで1人と居なかった為、2人の存在は非常に嬉しいものと感じている】。

・仕事量はあり得ない程こなしているが、どんな量だろうと一瞬【比喩にあらず！】で終わらせてしまう為、常に暇を持て余している。

・漫画やゲームに出てくる力を柊兄妹に与えるのが　最高の暇つぶしで、最近【ｊ○ｊｏの奇妙な冒険】と【ポ○ットモンスターシリーズ】にハマっていて、何か劉と皐月にそれ関連の力を与えようと企んでいる【勿論、暇つぶし】。

・近いうち、劉と皐月を神にしようとしている【ゼウスの次に偉い位置】。

・ハートが飽きれる程強い

・イタズラが大好き

・恋人募集中です

ゼウスを紹介（後書き）

皐月「.j◯.joとポケモンって、あなたの趣味？」

ーーそうそう。.j◯.joの計算された戦闘なんかは尊敬ものでがんす。いつか、私もあんな戦闘を書きたいでがんす

量「でも、僕達を最強にしちゃうならそれは……」

ーー今から最弱にするかな……

ゼウス「許さねえよ？」

ーーじゃ、じゃあストーリーで素晴らしい物を！！

「あなたは行き当たりばったりが最高とか言ってるから、一生無理ね」

ーー………

「又いじけたね」

「えぇ」

ーーふふふふふふふふふふふふふふふふはふふふふふふふ

4話　あの髭は何故毒が効かないんだ……（前書き）

皐月「随分と久しぶりね」

ーーいやー、ゴメンなさい……

劉「どうしたの？」

ーーいや、どうしたもこうしたも無いんだよ……。と○る科学の超電磁砲の二次小説にはまって読みふけってたら、気付けば１０日も……。焦って、今さっき書き上げた次第です……

「あー、ごめん。かばえる場所無いや……」

「今日の食事には気をつける事ね？」

ーー皆様、ゴメンなさい……。僕死ぬかもしれない（泣）

「大丈夫よ、死ぬなんて楽な事にはさせないから？」

ーー……。

「あー、部屋にこもっちゃったや……」

「あら、もう少し弄りたかったのに」

「皐月が黒い……」

4話　あの髭は何故毒が効かないんだ……

「ねぇ？」

「何？」

「異名、欲しくない？」

「欲しい」

「手早く手に入れるにはやっぱり……」

「「悪名！！」」

どうも、劉です！

キャラクター紹介なんちゃらで暫くストーリーを進めてなかったから、久しぶりですね！

ストーリーって言っても相変わらずの行き当たりばったりUターン物語なんですけどね！

ま、そんな事はどうでも良いでしょう！

取り合えず、近況報告です！

卒業しました！　学校！！

ーーん？　飛ばし過ぎだって？　いやぁ、そうとも言い切れないんだなぁ～。

1年で全過程終わらせてしまいました！　てへ♪

ーーえ？　男の「てへ♪」は需要がない？

チッチッチッチッち！

大丈夫！　ルックス良いから！！

ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！　嫉妬の混じった罵声が心地良いね！！！

これが、いわゆる【イケメンに限る！】って奴ですよ！！

ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！

＊＊＊

……皆様、本当にごめんなさい……

どうかしてました。

忘れて下さい（泣）

ま、謝ってばかりでは進みませんね。

近況報告の続きですが、ありません。

一言で済みますね【１年で全過程終わらせて卒業しました】です。

先生方も僕達の成長具合に驚愕する事を馬鹿らしく思ったのか、途中僕達が何をやっても反応が薄くなってしまったのは淋しかったですが、良い思い出ですね。

先生、教える

←

柊兄妹が新技を会得した！　Ｌｅｖｅｌ　ＵＰ！

←

先生、更に教える

←

柊兄妹は更に新技を会得した！！　Ｌｅｖｅｌ　ＵＰ！！

この感１０分！

因みに、会得する為に技の概要を説明して貰っている時間の方が実践より長かったです。

何せ、技を理解したら一発で完璧な魔法がドピュン♪でしたからね。

僕達も先生も調子に乗ってドンドン覚えて行ったら、【君達に教えられる事は無い……免許皆伝だ！】なんてある日突然言われまして、何故か師弟関係の設定になっているのはスルーするとしても、いつの間にか学校で教える範囲をぶっ飛ばしてアリアドネーの教授レベ

ルの物事をやっていたみたいです。

なので、今僕達が少し本気を出せば新しい画期的な論文を出せるだけの知識は身についてると言ってました。

メレスさんも、僕達の成長を楽しみにしておられたので、期待をしていたらしいのですが、1年足らずで教員レベルの知恵を持ち、世界最高峰の魔法使いになるとは夢にも思ってなかった様で、驚きと呆れを通り越して一種の映画を見ている様な気持ちで僕達を見ていたらしいです。

それ以外は、嫉妬に狂った生徒たちが僕達にちょっかいを出してくる事がありましたが、皐月の一睨みで大概は済ませました。

皐月に睨まれると、背後に般若やらなまはげやら、死神やらが仲良くこちらを威圧しているのが見えるらしいです。別段怖い顔になっている訳では無いのですがねー。何故こちら側で般若やらなまはげを知っているんでしょうか？　ギャグ補正？

突っ込んでくる生徒達の血走った目が直ぐに真っ白くなり、代わりに顔が真っ青になり、冷汗をダラダラと垂れ流して逃げて行くのが恒例のパターンでした？

楽で良いー。

嫉妬に狂う生徒がいるのが楽しくて、僕達の関係を見せ付ける様な事を連発していた僕達も僕達ですがねー。あはははー。

楽しかったー。

皐月におんぶして貰ってる時の周りの反応♪

嫉妬で突っかかってくる生徒なんて最初は居なかったんですがね～。

何か知らない内にやってたんですかね？

＊＊＊

異名が欲しい。

皐月がそんな事を言い出したのは、本日の客を全て捌いて一息ついていた時の事だった。

2人並んでソファに座り、アールグレイを堪能していると、少しだけ笑みを浮かべた皐月がカップと皿を上品に持ちながら劉に質問した。

「悪名って言っても、悪過ぎる事はしたく無いのよね」

「うん、出来れば被害は出ない様に抑えるけど、相手に恐怖をベットリとこびり付かせる。けど、何年かたって見ると思い出話で笑える程度のレベルが良いね」

「そう、そのくらい」

「でも、難しいさじ加減だね……」

「お～お～、楽しそうなお話ししとるやんけ！」

「……」

「……」

何となく話が咲き始めた頃、僕達の真後ろから聞き慣れたハイテンションな声が聞こえて来ました。

最近じゃもう慣れてしまいましたねぇ……このテンション。

何ででしょうね、暇なんだと思うんですが週に一度は必ずやって来て、毎回僕達の料理とマッサージを楽しんで行くんですよねー。

1回聞いて見たんですが「何で、僕達なの？　そっちってモット進んだマッサージやら料理やらたっぷりあるだろうに」と、言ったら「あほうめ！　親友とのスキンシップが大事なのだ！！」とお返し頂きました。

親友……ねぇ～。

まぁ、満更でもないし良いか。

「いらっしゃい」

「ん？　最近まったく驚かなくなったのは詰まらないな……。そ

れより、その会話混ぜてくれ！」

「ＯＫ　ＯＫ。ちょうど相談相手が欲しかった所だよ」

「そうね、テンションはゼウスが一番あってるわね」

「おう！　任せろ！！」

「まぁ、座りなさい？　紅茶あるけど、アールグレイとダージリン、ウバのどれが良いかしら？」

「おう！　サンキューな！！　だが、紅茶は詳しく知らん！！！　適当に宜しくちょ♪」

「それじゃ、アールグレイにしておくわね？」

「おう？」

＊＊＊

「ウサギの着ぐるみ着ながら、銃をぶっ放してマラソンするのはどうだ！」

「マラソンは疲れるからいやよ」

「断るのそこなんだね」

「ウナギの着ぐるみ着ながら、銃をぶっ放してマラソンするのはどうだ！！」

「マラソンは嫌って言ってるじゃない……」

「おかしいのはそこじゃないって……」

いやー、なかなか難しいですね～。

実害は出さない前提の悪行って案外思い付かない物ですね。

「ん～、そういえばお前等！　神にならないか！！」

「……いきなり過ぎない？　あと、何で今なの？　あまり関係ないじゃない」

「いや！　あるぞ！！　神になれば！！！　自然と！！！！！　異名見たいなのは付いてくるぞ！！！！！」

何でこんなに力入ってるんだろ？

もしかして、もともと神にさせたかったのかな？

……断りたいけど、正直この人には逆らっても意味ないんだよね……。

多分、もう僕達の存在は【神様】になってる気がする。
この人、楽しい事に対する行動力が半端じゃないから、言い出した瞬間当たりに僕達は神様になったんだろうね……。
あっ、皐月が諦めた感じの笑顔でこっち見てるや……

「確認するよ？　　僕達って、もう神になってる？」
「おう？」

あはははは―、良い笑顔だ？
……紅茶に毒盛っとこ。

「ねぇ、神になって、何か変わる事ってあるのかしら？」
「お前達をこの世界の創世神って事にしたから、お前達は宗教の対象になった！」
「みんな、僕達の姿って知ってるの？」
「知ってるぜ！！」
いやー、親指立てて良い笑顔。

何で毒の効果が無いんだろーね。

「それって、問答無用に拝まれちゃうのかしら？」

「いや、お前達には神になった時の新しい姿を与えた」

「今の一般人の姿と神の姿があるって事？」

「そう！　だから、普段の生活に支障は無い！！」

「ま、それなら良いかしらね」

「お前達の名前は双子神【ネフェル】と【ティア】だ！！」

ネフェル……ティア。

ネフェルティア。

ネフェルティティ……。

安易過ぎない？

この前の授業で出たばっかりじゃないか……。

あっ、皐月も呆れた笑顔でこっち見てる？

「良い名前だろ！！」

「「ハイ、イイナマエデス」」

「お～お～！　そんなに褒めんなや！！」

「そだ、他の神様方は知ってるの？」

「たった今通達した？」

「……」

「……」

ろうね……。

あーあ、幸せそうな顔しちゃって～……。

うん、致死量の毒いれても効果ないんだろうか？

「そ、そんな事よりも悪名の相談しよう」

うん、この話題面倒臭いや。

多少、不自然だけど話題を変えちゃおう。

「嘘ついたらハリセンボンを本当に飲ませて仕舞おうかしら？」

何も疑問に思わずに話題に乗ってくれるのも皐月が同じ考えなんだろうね……。

でも、過激だよいきなり……。

「ショック死しちゃいます……。でも、良いかも。何か悪い事をしちゃった子供を見かけたら、ハリセンボンを飲ませるぞって脅す」

「良いわね、程よくコミカルで♪」

「それ、俺も参加して良いか！？　楽しそうだ！！！」

「良いよー」

「それと、見た目はどうしましょうか？　もう、【ヒイラギ】で充分に有名よ？」

「そうだね、６０歳の僕達でやろうよ」

「良いわねそれ」

「考えてみれば、年齢変えるのは初めてだね」

「そうね、今まで必要無かったものね」

「ハリセンボン婆ちゃんとハリセンボン爺ちゃんか！　面白いな！！」

「うふふふ？　良いわね、可愛いわ」

「どうしよう、今すぐ言っちゃう？」

「えぇ、ちょうど紅茶も飲み終わったし、私は良いわよ？」

「あ、ちょっと待ってくれ！　あと少しで飲み終わるから！！」

「はいはい、じゃあ、１０分後にしようか」

「おう！　それまでに、メンタル面の準備を済ませておくぜ！！」

「いらないでしょ……」

「いや、大事だぞ！？　今の高ぶり過ぎたこのハートでは、間違いなく空回りしてしまう！！」

「何を言ってるの、普段からでしょう？」

「あはははー？　言えてるね」

さて、ハリセンボン爺ちゃんか……。

うん、楽しみになって来た？

頑張って、人々を恐怖のどん底に叩きつけよう！

4話　あの髭は何故毒が効かないんだ……（後書き）

【作者はただいま原因不明の重体により、入院中でございます】

皐月「クスクス？」

劉「さ、皐月が黒い……」

5話　凄い決断力やね……。いや、ただの馬鹿？（前書き）

皐月「また随分と時間が空いた物ね。何をしてたのよ？」

ーーいやね、この空いた５８０年で色々と３人にやらせ様と頑張って書いてたんだけど、どれもシックリ来なかったから、思い切って原作に突入させてしまうかどうかを悩んでたのよ……

「様は、発想力が乏しかったって訳ね？」

ーーはい……そうなってしまいますね……。

「だんだんと、間が空いて来てるから、次は速くに投稿できるようにしなさいな」

ーーうん、頑張ります……

5話　凄い決断力やね……。いや、ただの馬鹿？

「……何で？」

「……腰が痛いわ」

ドゴォォォォォォン！！！！！！

ズドォォォォォン！！！！！！

「……ねぇ？」

「何かしら？」

バギョォォォォォン！！！！！！

ビリビリィィィィィ！！！！！！

「目の前でドンパチやってるのって、ラカンとナギだよね？」

「……ええ」

ベロォォォォォン！！！！！

メキョォォォォォォン！！！！！

「あぁ……ゼウスに思いっきし、飛ばされた。って、事で良いのかな？」

「多分、あってるわ。それも、少なく見積もっても５５０年以上はいってるわね」

スコォォォォォン！！！！！

ドドドドドドド！！！！！

「……これって、アレだよね？　鍋パーティーをやってたネギパーティーにラカンが強襲をかけた後の戦いだよね？」

「それね、確か１３時間ずっと戦ってたって言う」

ゾバァァァァァン！！！！！

ポポポポーーーーーン！！！！！

「……これって、僕達の幸せ退屈ライフは終わったって言っても良いのかな？」

「そうね、ゼウスに強制終了させられたって考えて間違いは無いわね」

「僕達の幸せ退屈ライフを見てるのが退屈だったから、この時代に送ったのかな？」

「間違いなくそうね」

「……」

「……」

「いつか、ゼウスに地獄を見せるわよ」

「あぁ……賛成」

ゴドォォォォォン！！！！！！

チョメーーーーー！！！！！！

＊＊＊

どうも、お久しぶりです。

劉デス！！

送られちゃいましたね……。

せっかく、ハリセンボンじじい何て言う名前を貰ったばかりだったのに、無駄になっちゃっただろうなぁ～……。

ま、そんな事は良いとして、１番大事な事！

眠い！
痛い！
寒い！

うん、何故かゼウス君はパジャマの僕達を地面にほっぽり出してくれましてね？

今の状態を簡単に言うなら【パジャマの双子が地面に寝てる】。

うん、しっくりくるね。

そういう事なので、身体中が痛いんです。寒いんです。

いや、健康には良いらしいですが、今の僕達には健康も何もあったもんじゃ無いですからね……。

何てったって、不死身ちゃん？

それに、眠いのは多分だけども、単純に睡眠時間が足りないんだと

思いますね。
僕達が寝ついた直後にココへ送ったんでしょうね……。
そこで、こんな爆音が連発しているものだから、起きてしまったと……。
うん、寝た気がしないもん。
授業中に寝ちゃってすぐに起こされるあの感じにソックリ。
この嫌な倦怠感が特に。

「ねぇ？　適当な家を出してまた寝ない？」

「えぇ、そうしましょう」

「紅き翼（アラルブラ）と合流するのは凄く魅力的な話だけど、今会ってしまうとゼウスの思い通りになってしまいそうなのが嫌なので、今日の所はやめにしておきましょう」

「そうね。だとしたら、いつ頃会いに行こうかしら？」

「フェイト達に嵌（は）められて、英雄から反逆者に落とされた頃で良いんじゃ無い？　多分だけど、藁にもすがる思いなはずだよ？」

「良いわね、それ」

「じゃ、もう寝ようか」

「えぇ、眠た過ぎるわ」

ってな訳で、ログハウスを出して寝ました。

うん、1番最初に出したあのログハウスね？

まぁ、寝た事自体は良かったんですが、この時の僕達は眠た過ぎて冷静な判断力を失っていたとしか思ませんね……。

こんな単純なミスを犯すなんてね……。

～？？？～

「あ～、身体が動かねぇ……」

「あんな馬鹿と十何時間も戦い続けたんだ、当たり前だろ！」

「良いじゃねえかよ」

「ーーん？　アレは何ですかねぇ？」

目の前には、赤い屋根の大きなログハウスがあった。

「こんな森の中に何故？」という気持ちもあったが、この鳥頭(とりあたま)をお

ぶり続けて歩くのは辛いものがある。

……どうしようか。

「……ログハウスじゃのぅ」

「しょうがない、ナギもこんな状態だ。少しだけ休ませて貰おうか？」

「えぇ、そうしましょう。私達も待つ事に疲れてしまいましたしね。私が交渉してきますよ」

「あぁ、頼んだ」

～劉～

「……」

「……」

あ、どうもおはようございます。

少し前に起きました。

今は朝風呂に入って、ソファの上でまったりしていたのです。

いや、朝風呂と言っても、時計は全く当てにならないんで、分からないんですがね……。

あ、凄くどうでも良い話ですが、家にいると僕達の間に会話は全くと言って良い程ありません。

双子だからなんでしょうかね、いちいち会話しなくても分かるんですよね。

考えてる事とか、こう言ったらこう返事するとか、次にする行動とかが。

なので、お互いソファで身体を寄せ合って暇を満喫しています。

まぁ、端的にこの沈黙が心地良いのも多いにありますがね。

（お腹すいた……軽いご飯作ろうかな）

立ち上がって、キッチンに向かう僕を何も言わずに見送る皐月。

うん、皐月もお腹はすいてるよね。

さて、今日は何を作ろかｎ……

ピンポーン　ピンポーン

ん？

誰か来た？

ーーん！！

そう言えば、ここってナギとラカンがドンパチやってたすぐ近くじゃない！

まずいなぁ……。

……ま、いっか。

初対面の僕達にいきなり仲間になれなんて言い出す訳が無いよね。

ピンポーン　ピンポーン

おっと、速く出てあげなきゃね。

玄関に向かう途中皐月に苦笑いを見せたら、皐月も同じ表情をしてました。

がちゃ

「はい、どうされましたか？」

「いきなりで申し訳ありません。旅の疲れを癒させて頂きたいのですが、大丈夫でしょうか？」

うわ～……。

アルビレオだ～……。

かっこ良いー。

うわ、凄い感動する。

いや、何だろ変にテンション上がって来た！

でも、しょうがないよね！？

好きな漫画の登場人物と出会える何て夢物語だよね！？

うわ！

後ろには、ナギを抱えた詠春にゼクトも居るし、小型の龍も居る！！

あー、今なら感動で泣けそう……。

しょうがないよね……。

「何だ、そんな事でしたか。どうぞゆっくりして行って下さい」

「えぇ、助かります」

「さ、どうぞ中へ」

あ、そう言えば日本語だ……。

ま、原作が日本の本だし、当然の処理（ゼウスの）だよね。

＊＊＊

「う、うめぇ！！」

「うまい……」

「うまいのぅ……」

「美味しい……」

テーブルの上には、パルメザンチーズを使ったリゾットが６人分。

丁度、僕達もご飯時だったから一緒に食べてます。

それにしても、気に入って貰えた様で良かった。

ナギなんかは食べる勢いが異常だもん。

うん、料理人にとって最高の喜びだね。

「気に入って貰えた様で嬉しいです」

「食後にはデザートも用意してるわ」

「いや、本当に美味いよこれ！　その辺の店の物なんか眼じゃねえ！！」

「あはははは、いや、僕達も前は店を経営してましてね。料理には自信があったんですよ」

「何という名前じゃ？　こんなに美味いならもしかしたら知ってるかも知れん」

「一時期は少しだけ有名だったんですが【ヒイラギ】って、店を知ってますか？」

「「「……は！？」」」

「……え！？」

あれ？

この反応、もしかして知ってる？

知らないと思ってタカを括ったけど、軽率だったかも……。

そういうえば、コッチの人って長寿な種族はあるけど、５００年間も見た目が変わらないのって流石にあり得ないよね？

……あ～、まずい。

皐月がジト目でコッチ見ちぇる……。

うん、素直になろう。

やっちゃったぜ僕。

「もしかして、５００年以上も前にアリアドネーで話題になった御店ですか？」

「あ～、知らないと思ったんですが、もしかしてまだそこそこ有名なんですか？」

「そこそこも何も、既に一種の伝説ですよ！？」

「そこまで！？」

「えぇ。当時ではあり得ない食材や調理法。更には、異常な程に効果をもたらすマッサージ法を駆使して、たったの１年で実質アリアドネートップに登り詰めた事も勿論ですが、それ以上に話題になった事はある日突然その経営者が消えた事です」

あはははは－。

なるほど、ゼウスの仕業だね？

どれだけ有名な物も５００年以上語り続けられるとは考えにくい。

いや、プロの調理人や整体師見たいなその道の方々に限定的にならずっと残るとは思うんですが、まさか一般人の皆々様方にまで語り継がれるとは考えにくいですよ。

「【ヒイラギ】が消えてからは、その調理法を真似したパチモンの様な店が乱立した様ですが、１度【ヒイラギ】の味を知って仕舞った人々から言わせると、それはそれは酷い物だったらしいです。今現在でも、【ヒイラギ】を模した店は多々ありますが、何処もかしこも本物とは比較にもならないと言われています」

あ～、一概にはゼウスのせいと言えない言葉がありましたね……。

ま、しょうがないのかも……。

だって、僕達の料理は美味しいもん。

いや、本当に。

「そうだったんだ……知らなかった」

「知らなかった？　これは、一般常識と言っても過言ではない話ですよ？」

「いえ、昨日は普通にベッドで寝てたのだけど、今日眼が覚めたらこんな訳の分からない所にいたのよ。貴方達、未来に人を飛ばす魔法って存在するのかしら？」

あー、はぐらかした。

結構厳しいはぐらかし方だけど、この後にマッサージでもして【ヒイラギ】の経営者だったって事を信じさせれば一気に信憑性は上がるって考えだね。

あーあー、皆僕達を何か変な物を見る様な眼で見てる。

「そんな魔法は存在しない。ましてや、５８０年も前にそんな物が存在するとは到底思えん」

「そうですか……」

「正直な感想を言うと、あなた方のいう事は非常に信憑性が欠ける物があります。ありますが、こんなに美味しい物は食べた事はありません。それこそ【ヒイラギ】の経営者だったと言われて、素直に納得できる程にはね」

「ありがとうございます。うーん、そうなると僕達は何でこんな所に居るんだろ？あ、そうだ！皆さん疲れてるんでしょ？　マッサージでもしましょう！　そうすれば、余計に信じる気になりますよ！」

＊＊＊

「何これ、滅茶苦茶身体が軽いんだけど……？」

「奇遇だなナギ、俺もだ……」

「今まで、身体に重りでもつけていたかの様じゃな……」

「魔法を使った様子もありませんでしたし、完全に人の力だけの効果ですね……」

「気に入って貰えたみたいね」

「なぁ、あんたらってもしかして、本当に【ヒイラギ】の経営者だったのか？」

「さっきからそう言ってるじゃない？」

「「「「……」」」」

ひそひそ

（なぁ、本当っぽくねぇか？）

（あぁ、料理の美味さとマッサージの効果だけ考えるなら、すぐに信じられるんだが、流石に過去から来たっていうのは……）

（じゃが、嘘を言ってる様には見えんぞ？）

（えぇ、それに彼等は本当に自分達が消えた後の話を知らない様子でした……。アリアドネーの利益が暴落した程の影響力だと言うのに……）

「あー！！面倒臭え！！」

「うわ！？」

びっくりしたぁ……。

ひそひそ話始めたと思ったら、叫び出すんだもん。

「お前等！　俺達と一緒に来ねえか！」

「「「……は！？」」」

「「……え？」」

……え～、マジですか？

5話　凄い決断力やね……。いや、ただの馬鹿？（後書き）

皐月「次もしも一週間以上空いたら……」

ーー（（（（（；゜Д゜）））））））

ーー……頑張ります。頑張るから、殺さないで！

「何言ってるのよ？　私が殺人をするとでも？」

ーーで、でも皐月さん！　か、顔が！　顔が凄い事に！！

「……殺すわよ？」

ーー……ごめんなさい（＿＿＿；）

6話　大人の男か……（前書き）

皐月「……まさか翌日に投稿するとは思わなかったわ」

いやね、最近空きまくってたから自分に喝をいれる意味でもね……

劉「気にはしてたんだ……」

うん、凄く気にしてた……。

数少ないお気に入りの人数減っちゃってたし……。

皆様になんて思われてるんだろうと思うと、怖くて夜しか寝れなかった……

「「夜しか寝れなかった！？」」

「それは大変ね……」

「暇を愛する僕達はいつでもどこでも直ぐに寝られる事が唯一無二の奥義、それが出来なくなるなんて……」

「凄く滅入ってたのね……」

「よく頑張ったね」

「よく頑張ったわね」

あれ……？

ボケを入れたら許された……？

6話　大人の男か……

「……な、仲間？」

「あぁ！！」

「私達が？」

「お前等以外に誰が居んだよ……」

うわ、馬鹿を見る様な眼で言われた！？

この、ネギま屈指の馬鹿であるナギに……。

うん、詠春やアルビレオも驚いてるのがありありと見える。

それよりも、何で僕達を仲間に？

アラルブラの目的を考えると、明らかに僕達は必要ないでしょ？

ただの調理人兼整体師だよ！？

いや、実際アリアドネーの魔法学校は出てるけど、彼等は知らないでしょ！？

「……何で、僕達を？　ただの調理人兼整体師だよ？」

「嘘は止すのじゃ」

「……え？」

嘘とはどう言った事でしょうか、ゼクトさん？

ん？　本当に何で？　僕達なんて戦った事無いんだよ？　何で「お前等本当は強いだろ？」見たいな事をおっしゃるの？

いや、ハリセンボン持って人を脅しまくったけど、コレは強さと言うか只の笑い話でしょうし……。

んー……分からないや。

「分からないと言う顔をして居ますね。もう1つあるのですよ、あなた方の事で語り継がれる事は」

「魔法世界開始以来最大の魔力保有量を誇る双子の話です。更には、世界最大であるはずのアリアドネーの学園をたったの1年で卒業しただけでは無く、半年で在学期間の知識と技術を全てを身につけ、残りの半年は教授クラスの事を軽々と習得していったそうです。今でも残っていますよ？　あなた方が付けて行った天井の焦げ跡は」

天井の焦げ跡……あぁ～、そう言えばあったね。

僕達が初めて魔法を使った時に付けた奴だねぇ。
学校からの借り物の杖で火を灯したら、５～６ｍ程の高さの火柱が出来てしまいましたね……。
うん、懐かしい思い出だー。

「あれ、まだ残ってるの！？　だって、もう５８０年も経つんでしょ！？」

「そんな歴史的財産を簡単に無くす訳が無かろう。今となっては、魔法使いにとっての神聖な場所になっておる」

「神聖って……」

「大体、少しだけ考えてみれば分かる話じゃろう？　いくら、かの有名な【ヒイラギ】の経営者がある日忽然と姿を消したからと、５８０年も話題に登る訳が無かろう。これが語り継がれる背景には、お前達の異常とも言える経歴があるからこそじゃ」

「……はぁ～。随分と過剰な評価を頂いている様ね……」

「過剰とは随分と謙遜なさいますね。ならば、火を灯すだけで天井を焼く事がどれ程異常な事かを理解させてあげましょうか？」

そう言うと、アルビレオが懐から杖を取り出してナギに渡した。

なる程ね、実演してくれると。

あ、でもこれで僕達が本物って事を証明出来るか。

ナギの後に杖を借りようかな。

お、ナギが杖を構えた。

うん、対抗心が丸見えだね……。

こっち見て「やってやるぜ」的な事を言ってる。

「プラクテ　ビギ・ナル　”火よ灯れ”！！」

おー、すごいすごい。

天井が真っ黒になってる……。

うん、吹き抜けじゃないし、高さ的には２５０ｃｍプラマイ２０ｃｍって所かな？

基準が無いから分からないよね～……。

どうなんだろ？

あ、でもナギの魔力も凄いらしいから、コレは凄い事なのかな？

まぁ、他人の家を躊躇い無く焼く所がナギっぽいね、うん。

僕達じゃ無かったら、大変な事なってるよ？

「弁償しろー！」「訴えてやる！」……言って見たいなぁ。

……止めよ、変に茶々いれて話を停めるのは面倒だや。

ただ、周りの皆は眼をひんむいてるね。

火じゃなくて、天井に。

そりゃそうよね、いくらナギの仲間だからってコレを享受出来るのはラカンくらいだよね。

この家を弁償するｍｏｎｅｙなんか無いだろうから、心中はおだやかな訳ないね。

詠春なんか汗ダラダラで固まってる。

「あー、天井焦げちゃったね。良いや、どうせ使い捨てだし」

「は！？　使い捨て！？」

「うん、そうだよ？　こんなの買うのなんてわけないから全然大丈夫？　あはははー」

「「「「……」」」」

うん、コレは気持ち良い沈黙だ。

……やせ我慢じゃ無いよ？

あー、詠春が泣いてる。

今までが貧乏旅行だったのかな？

「そうだ、ナギ？　杖を貸してよ。コレに火を灯したら、正真正銘”柊兄妹”である事を信用させてあげるよ」

「2本あるかしら？　私も久しぶりにやりたいわ」

「なら、コレをどうぞ」

「ありがとうね」

アルビレオがもう1本杖を貸してくれた。

……何本持ってんの？

「さ、外に出ようか？　室内でやったら、皆の肺が焼け爛れるよ？」

＊＊＊

「「「「……」」」」

ボォォォォォ！！！！！

「あはははは－？　少しだけ大きくなったかな？」

「そうね、魔力伝達が器用になった見たいね」

ボォォォォォ！！！！！

（なんだよ、これ……）

（ナギが、赤子の様だ……）

（……なんじゃ！　伝わってくる魔力量だけで潰されてしまいそうじゃ！）

（……詠唱もせずに火を！？）

いやー、やっぱり驚かせる方は気持ちが良いね。

固まってる４人の表情が面白いなんて物じゃない。

いや、別に笑うの意味じゃ無いよ？

わかってるよね、いらないフォローだよね、鬱陶しいよね、自覚してる。

あはははは、楽しー？

うん、そろそろ消そう。

ボォォォォォ……しゅっ……。

「さ、信じてくれたかな？」

＊＊＊

「それにしても、未来へ送る魔法ですか……」

「ふむ、人を未来に飛ばせるのならば、術者自信も飛ぶ事は可能じゃろうか？」

「しかし、未だに少し信じがたいな……」

「そういや、劉と皐月は過去に帰りたいのか？」

「「全然」」

「自分の住んでた場所にもう少し未練を持てよ……」

いやー、皆信じてくれました。

うん、流石にあの火柱を見て信じない訳には行かなかった様です。

皆が固まっていたのを面白おかしく観察してたんですけど、後ろの方向から何やらパチパチと物が燃える音がしたんですよね。

振り返ってみると、あらビックリ。

僕達のログハウスが燃えていました。

1番始めに硬直から解けたナギがそれを見て、やっべーなんて言ってましたが、華麗に無視を決め込んで指輪(倉庫)にログハウスをしまいこみ、新しい新築のログハウスを出したら、何かを悟った様な顔をして「「「あー、こいつ等もバグキャラか……」」」って、自己解決してました。

うん、あの眼はアリアドネーの先生達が僕達に向けてた眼だ……。

生優し〜い諦めの眼。

僕達から、言わせてもらおう！

それ正解！

「2人は、これからどうするんだ？」
「せっかくナギが誘ってくれたから、一緒に行こうかと思うんだけど、大丈夫かしら？」
「大丈夫も何も、心強い限りです」
「飯も美味くなるし、マッサージもしてもらえるからのう」
「あはははは、嬉しいね？　精一杯頑張らせて頂きますよ」

＊＊＊

ども、あれから何ヶ月か経ちました！
この感の描写が無いからぶっ飛ばしました！
まぁ、一応の軽い説明をしますと、一時期はアルギュレーの辺境に追いやられていた時期もありましたが、アラルブラが前線に出ると、これがこれが大活躍！
あ、この頃には既にラカンは仲間になってました。
えーと、ついでに皆様もご存知の【グレート＝ブリッジ奪還作戦】

なのですが、僕達も思いっきり戦いました。

いや、今までの戦いで手を抜いてた訳では無いですが、自分達の知ってる戦いだと思うと、やはりテンションが上がるよね！

えと、お陰様で僕達にも二つ名が付いたみたいです！

僕は「蒼風（あおかぜ）」や「完全麻痺（パーフェクト・パラライズ）」に「ソニックブーム」

皐月が「雅風（みやびかぜ）」や「完全睡眠（パーフェクト・スリープ）」に「紫の眠り姫」

双子セットでは「風の双子」や「戦場の救い手」なんて言われてるみたいですね。

理由だと、まず僕なんですが、僕が走ると蒼い風が吹くみたいなんです。

いやー、そこまで〇ニックを再現してくれてるゼウスに嬉しさのあまり感謝しかけました。

危ない危ない……。

後、僕は気化毒を使って相手の身体を麻痺させて戦ってたんですよね。

面白かったですよ？

びっくんびっくん言ってた（爆笑）

次に皐月ですが、これまた気化毒で相手を眠らせてました。

あ、因みにコレは個人に効くものではなく、広範囲に広がるものですから、すごく効率が良いんですよね。

紫って言うのは、色付けたいなぁって思ってたら、紫になっていたそうです。

空気が紫色になっていたからなんでしょうね、紫の眠り姫って言うのは。

あと、勿論の事僕達は人を殺していません。

全員気絶か睡眠か麻痺で動けなくさせた後、安全な場所まで転送しました。

一部では、甘ちゃんだのなんだのと言われましたが「そんな文句を言うなら、僕達以上の戦果を出して下さいね」と、微笑んで言ったら、皆黙ってしまいました。

うん、これを言われるのは予想出来てた筈なのにね。

いやー、それにしても、やっぱり嬉しいですね、異名！

うん、ハリセンボンじじいなんかよりずっと嬉しい！

双子のせいか、やっぱり対をなす物がほとんどでしたが、コレは予想外の喜びでしたね。

なんか、双子って認知されてるあたりが良い！

後、ファンクラブも出来ました！

これね、実はナギがよりも若干人気は高いんですよね！

まず、単純にルックスが良い。

うん、神様に嫉妬された要因の１つでございますから、これはもう半端じゃ無いと言っておきましょう。

自分で言ってしまいましょう！

僕の顔をは既に芸術品です。

更に、もう１つ。

どちらかと言うと、こちらの方がメインなんだろうと思います。

「戦場の救い手（ワー・セイヴィング）」

戦場でさえも相手に手を差し伸べる優しさが一般人に受け入れられやすかったのでしょうね。

ま、優しさって言ったって、相手を救いたいと言うよりも、殺したくないだけだったので、なんとも複雑ですがね。

んー、でも、心中はどうであれやってる事は変わらないし、気にするのも無駄な話ですけどね。

ほんで、ガトウとタカミチが仲間になりました。

ガトウさん……かっこ良かったー。

何なの？

あの渋いのが似合う感じ、神楽坂アスナちゃまの気持ちが凄く良くわかった。

うん、僕あんなおじさんなりたい！

ハリセンボンじじいなんかやってたのが恥ずかしい！

あ、でもお酒とタバコは嫌いだし……。

よし、諦めた。

我が道を行こう？

＊＊＊

どうも、ただいま本国の首都に来ています。

僕達アラルブラの協力者に会いに来たらしいのですが、あれですね。

マクギル元老院議員とアリカ姫に会いに行くイベントだよね。

……死んじゃうんだよね、マクギル元老院議員……。

この人は助けてあげたいな～……。

多分、これから起こる出来事だから、頑張れば防げるかもしれないし、やってみよう。

なんか好きなんだよねー、あの人。

まぁ、緊張するけど今は2人との初対面に向けてメンタル整理をしましょう。

いや、何かアリカ姫の前だとがっちがっちになっちゃいそうでね……。

うん、あの人には好印象を植え付けたいね。

何はともあれ、頑張りましょう。

6話　大人の男か……（後書き）

皐月「明日は投稿出来るのかしら？」

いや、無理やね。

正直、他にも趣味はありますからねー。

劉「じゃ、どの位のペースを目指してるの？」

5日に1度！

「少なくないかしら？」

んー、でもねー……。

「何でそんなに時間かかるの？」

行き当たりバッタリで進めるから、話の続きを考えるのに苦労するの。

「あー、自業自得だね」

「自業自得ね」

ふふふ、ど直球って効く時と効かない時があるね。

「……今は？」

……効いてる時……。

7話　時代の最先端を行くのは親父萌えだよ（前書き）

皐月「そういえば、ゼウス最近出て来ないわね……」

劉「あぁ、そういえば」

なんか、無理矢理原作突入させたから、2人に会うのが怖いみたいだよ？

「怖い！？　あの楽観大王ゼウスが！？」

いやね、この前2人がゼウスに盛った毒が効いたらしくて、流石にビビってるらしい……

「え？　でも、全然効いてる様には見えなかったよ？」

「えぇ」

いやそれがね、ゼウスって2人の事を神様にしたゃったじゃない？

「うん」

毒も神様を殺せるレベルまで底上げされちゃったみたいで、今トイレに篭ってる。多分、毒のレベルが上がってくるのにタイムラグがあったんだね。

「あぁ、なるほど。一言でいえば、ざまぁ見ろだね？」

「あぁ、なるほど。一言でいえば、ざまぁ見ろね？」

うん。

7話　時代の最先端を行くのは親父萌えだよ

「「いらっしゃいませ〜」」

どうも、劉です！

いやー、開店しました！

【ヒイラギ】を！

え？　いきなり過ぎて分からない？

だよね！

あのね、少し前に本国首都でアリカ姫とマクギル元老院議員と会いました。

いや、感動しましたよ！

マクギル元老院議員の生「いや、わしちゃう」！

僕達の心を鷲掴みにした言葉ですよ！　何この可愛いおじさん？

もうメロメロ。

それで、こんなに可愛いおじさまを死なせてしまうのはあまりに勿体無い！

と言う事で、マクギル元老院議員には指輪をプレゼントしておきました。

見た目は何の飾り気の無いただのプラチナ性の安っすい物なのですが、神のご加護がついてます。

その神って、僕達ね。

いやね、ゼウスにさせられたとは言え、僕達も立派な神様らしいのですよ。

ゼウスが言うには、偉さはゼウスの次に相当するとか……。

周りの神様に反対されなかったのかと聞けば「めちゃくちゃ反対されたから、黙らせた！！」なんて返事が帰ってきた。

でも、力量だけを抜粋すれば、他の神様方の中でも群を抜いてる様なので、極端な反抗も出来ない状態ではあるみたいです。

……同情します、神々一同には。

そんななので、当然の如く加護を与える事も出来ます。

それを物に宿らせて人に送れば、死の危険さえも避ける事が出来ます。

しかも、コレは僕達が直接手渡した物ですので、効力は半端じゃな

いですしね。

ま、この程度の施しは我等が愛しのマクギルたんの為と思えば、何でもない！

それと、もう１つ。

「気安く話しかけるな下衆が」を聞けました！

これも感動しました！

原作に僕達が関わってる感じがして、感慨深かったです！　あぁ、幸せ……。

嬉しい事に、アリカ姫の中で僕達は悪い印象では無いらしく、話し掛けても下衆呼ばわりはされませんでした。

むしろ、人を殺さずに今までやって来た事にはお褒めの言葉も頂けました。

……Ｙｅａｈ☆

＊＊＊

それで、僕達【紅き翼（アラルブラ）】はただいま休暇を楽しんでおります。

いや、楽しむと言っても【完全なる世界(コズモエンテレケイア)】について調べる事が沢山ありましたので、調査班の皆は休めたのかどうか分かりませんが……。

僕達はまだ、調査なんて事が出来る程人生経験豊富なアダルトでは無いので、自然と戦闘班に振り分けられました。

うん、その方が楽でいい。

それで、冒頭に戻るんですよね。

【ヒイラギ】開店。

僕達感覚でなら、そこまで間が空いた感じはしませんが、世間の感覚ならば580年振りの開店です。

……凄く不思議な状態ではありますが、やっぱり気合が入りました。

僕達のお店を見に行く為にアリアドネーに行って見ましたが、驚きましたね。

凄くガタは来てましたが、まだ残ってました。

いや、嬉しかったですね。

自分達のやってた事が評価されていたんだなと実感しましたね。

ただ、感慨にふけるのも良いですが、いつまでも動かない訳にも行かなかったので、このお店を指輪(倉庫)にしまい、新しいお店を出してあげました。

内装は自分の記憶を再現させたので、以前とは一切違いの無い様になっています。

それと、以前かけた認識阻害は解けてしまっている筈だから、再度掛け直しました。

そして、満を持して【ヒイラギ】開店！

大盛況！

魔法世界中の話題をかっさらいました！

初めはまたパチモンだろうとバカにされた物でしたが、いざ料理を出すと、マッサージを受けると！

皆が黙って僕達を信じてくれました。

それに、何と６００年以上も長生きしている以前の常連客の方がやってきて、僕達のサービスを受けると泣いて懐かしんでいました。

お陰様で【ヒイラギ】復活を疑う者が居なくなるまで、時間はかかりませんでした。

＊＊＊

それと、アリカ姫のお話ですが、やはりナギにベッタリでしたね。
うん、ナギは明らか嫌々な雰囲気を醸し出してはいましたが、あれはただの意地ですね。
ただし、本人に自覚はありませんが。
それに、アリカ姫も今は付き合いやすいと言うだけで、明確な好意は寄せてませんね。
まぁ、原作を見る限りは時間の問題なんだけどね。
僕達は【ヒイラギ】の営業時間が終わると、まず初めにアリカ姫に話しかけるんだけど、適当な会話を2～3言交えて終わってしまい、すぐに取り頭の所に行ってしまうんですよね～。
その2～3言の間も視線がどことなくナギに吸い寄せられてるのが分かってしまうのが、凄くショックな所……。
……うん、いつもマクギル元老院議員に慰めて貰ってます。
マクギルさん……貴方の好感度はもうＭａｘを振り切りそうだよ……。

＊＊＊

「……で、貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！！　どんな夜遊びだそれはっ！！」

ナギが汚れて帰ってきました。

詠春が怒ってます。

アルビレオが後ろから観察してます。

ラカンがソファに座ってます。

僕達はその景色を感慨深く眺めています。

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！　何の為に秘密裏に調査してると……。大体万が一王女殿下にお怪我でもあったら、どうする気だ！！」

「姫さん、ノリノリだったぜー？　「楽しかったー」とかって」

うん、城に篭ってた人がいきなりそんな経験出来たら、人によっては凄く楽しめるだろうね。

アリカ姫は明らかに該当者ですよね、うん。

それにしても、僕達はいつまで経ってもこの不思議な感動が抜けないや……。

うん、やっぱり僕達は【ネギま！？】が大好きだったんだね！

「嘘をつけっ！　どうせ、貴様が無理矢理連れ回したんだろう！
姫にこんなご迷惑をおかけするとは、どうお詫びすればよいか。
国際問題級の……

「詠春さーん！」

そこで、タカミチの大きな声が響いて来た。

ん？　あー、そういえばここでアリカ姫が来て、ナギの疑いが晴れるんだっけ？

あと、何気にタカミチの初のセリフ。

ま、初登場が前話ですけどね

「あのコワイ冷血お姫様が今、廊下で僕に向かってニッコリ……。
僕ビックリしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです。確かにわらいましたよねっ」

「うむ、驚いたのじゃ」

凄いテンションでアリカ姫の伝言を伝えるタカミチに、それに同意するゼクト。

ゼクトも少しだけ赤面してる所を見るに、やっぱりアリカ姫って綺麗なんだね。

あと、タカミチ可愛いよ。

うん、皐月がタカミチを後ろからタカミチに抱きついてるもん。

あれが、あすなろ抱きか……。

うん、皐月可愛い

。

「……っ」

「な？」

タカミチの証言により、何も言えなくなった詠春を見て、アルビレオが後ろから笑ってるね。

うん、アルビレオは多分これ確信犯だね。

こうなるの、分かってて観察してたでしょ。

「それに……ちゃんと証拠も見つけて来たぜ」

「な……それは……」

＊＊＊

「マクギル元老院議員」

「御苦労、証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ……法務官（プラエトル）はまだいらっしゃいませんか」

「法務官（プラエトル）は……来られぬこととなった」

「……ハ……？」

「「え？」」

あれ、偽物？

指輪は？

はずしちゃった？

あれ、僕達の愛しのマクギルたんは死んじゃったの？

あれ？

変だな？

目から汗が出て来そうだ……。

マズイ、わりかし本気で悲しい。

僕達を慰めてくれたあの優しいマクギルたんが……。

「……あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここにきて……慌てて水を指すのも、やはりどうかと思ってね」

「……」

「ハァ」

ナギが完全に疑惑の視線を向け出したね。

この辺りなのかな？

マクギルたんをおかしいと感じたのは。

……あぁ、ダメだ。

ナギがマクギルたんを疑いだした時点でアレはもう偽物なんだ……。

「いや……その、私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ、君達も無念だろうが今回は手を引いてだな「待ちな！」……？」

「あんたマクギル議員じゃねえな、何もんだ？」

ボゥンッ！

「ぶ！？」

ナギの無詠唱の魔法で上半身が爆発して、燃え上がるマクギル元老院議員。

「「な……」」

「あぁ、マクギルたんが！？」

「ちょーーーっ！？　ナギおまっ何やってんだよッ！　元老院議員の頭いきなり燃やしておまっ……」

「マクギルたんを返してナギ！　今すぐ返せ！　あの人は僕達の癒しだったんだよ！？　何頭燃やしちゃってんの！？　今すぐ、ナギの頭を飛ばしてやるよ！？」

「ナギ、後で私の部屋に来てね？　たっぷりといいことしてあげるから。ただし、気持ちよ過ぎて一生目を冷まさないかも……」

「こわッ！　だが、よく見てみな3人共」

「何っ……」

「「えっ……？」」

「……よくわかったね、千の呪文の男。こんな簡単に間破られるとは、もう少し研究が必要な様だ」

あぁー、一気に冷静になった……。

姿がマクギル元老院議員ってだけで爆発の瞬間を見たら、取り乱しちゃったや……。

つい、ナギに対しても殺人予告しちゃったし……。

うん、皐月も同じ状態だったね。

思ってた以上に僕達って、マクギルたんの事溺愛してた見たい……。

優しいおじいちゃん？

……あぁ、目から汗がまた出てきた。

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガロ湾のそこだよ」

「てめぇっ」

「通しませんよ」

「くらえ」

あぁ、あれがまだ名も出ぬ元完全なる世界幹部（コズモエンテレケイア）の内の2人だね。

因みに、ボタン（作者）はコミックス派なので、少し情報は遅れていると思います。

ドンッ！

「ぶっ」

水と炎の塊が僕達の行く手を阻む。

「くっ」

「強ぇぞやつら！」

「ハッハ、だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！！　戦いやすいぜッ！！」

「同感！」

「フ……」

あ、フェイトが念話の準備してる……。

マズイ、マクギルたんの事でスッカリ忘れてた……。

「まずいッ！　あいつの念話を止めて！！」

「わ、わしだ！　マクギル議員だ……。うむ、反逆者だッ！
ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデーグ、柊劉と皐月。奴らは帝国のスパイだった！　今も狙われている。軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

ああ、やられた……。

それより、マクギルたんの声で反逆者と言われるのは、凄くくる物がある……。

うん、うつ病になれそうだ……あはははは……。

それより、フェイトよ……その呼び方はやめてくれ。

本物からはミー君とさっちゃんって、呼ばれてたんだから……。

「……君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

ゴッ！

＊＊＊

ああ、何やってんだろ……。

普段の冷静な僕等なら、フェイトも敵にすらならない程の力があるって言うのに、マクギルたんの事で冷静さを欠いて結局は反逆者にされちゃった……。

いや、でもしょうがないよね。

大切な人が死んじゃったら、パニックになるよね普通……。

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフフ、いいねぇ。人生は波乱万丈でなくっちゃな♪」

「タカミチ君たちは脱出出来たかな……」

「待っててね、マクギルたん……」

「すぐに、メガロ湾の底から引き摺り出して、埋葬してあげるわ……」

「……姫さんがやべぇな」

＊＊＊

事後報告。

マクギル元老院議員、メガロ湾から引き摺り出した所、生きてました。

「いや、石化してメガロ湾に沈められとったのだよ……」

……石化してたから、メガロ湾に沈められても生きて居られたんだね。

フェイトがこの手段を選んだのは、神の加護なのかもしれない……。

あぁ、ありがとう神様。

……あ、僕達だった。

7話　時代の最先端を行くのは親父萌えだよ（後書き）

ゼウス「んぐぉぉぉぉぉ！！　下痢が止まらん！！！！」

8話　チーン（前書き）

いやー、今回は疲れた。

皐月「1度文章が飛んだものね（笑）」

劉「完成真近だったね～……」

うん、6200文字いってたね……

あと、5分位で完成だったねアレは……

あの後、悲し過ぎて胸がキュンキュン来たよ。

アレだね、人って本当に悲しい時は胸にくるんだね……

「あぁ～、ご愁傷です……」

……ま、急ぎであるけど出来たしね、良いや。

8話　チーン

「よお。来たぜ、姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

どうも、こんにちは。

劉です！

皆さん分かりますよね？

アレです、アレ。

【夜の迷宮（ノクティス・ラビリントゥス）】にとっ捕まってた姫さんと、テオドラちゃまを取り返しに来たシーンでございます。

うーん、やっぱりこのシーンは印象強いね。

凄く鮮明に覚えてたよ。

＊＊＊

タルシス大陸極西部オリンポス山【紅き翼(アラルブラ)】隠れ家にて

「何だ、これが噂の【紅き翼(アラルブラ)】の秘密基地か！　どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリはよ」

「何だ貴様、無礼であろう」

「へっへ～ん。生憎、ヘラスの皇族にゃ、貸しはあっても借りはないんでね」

「何ぃ？　貴様、何者だ」

あぁ～……可愛い。

何あの可愛い過ぎる子？

頭が良いけど元気でじゃじゃ馬な娘(こ)大好き。

……完全に感情だけ優先しちゃう娘(こ)は苦手だけど。

「ん？　大きい建物の方が良い？　直(す)ぐに出そう！」

「「は？」」

ズニュニューン！

「「「「「「「「……は！！??」」」」」」」」

出しました！

ノイシュヴァンシュタイン城を！

んー、いつ見ても素晴らしい城だね！

ん?

ノイシュヴァンシュタイン城って何だって?

えっとね、ネットで検索してごらん?

凄く有名な城だから、1発で出るよ。

それと、この城は1度皐月に連れられて行った事があるんだけど、凄かったね。

僕大好きだよ、こういった見た目に重点を置いた建築物って。

……そんな事より。

皆固まってるね。

ま、予想は出来たよね。
目の前にいきなり馬鹿でかい城が僕の指輪から出て来るんだもんね。
それは仕方が無い。
うん、うん。

「な、なんじゃコレは！？」

復帰第一号テオドラ！
ヒューヒュー！

「コレは、城よ」

「「「「「「「……」」」」」」」

「何処から出したと言うのじゃ、一体！？」

「指輪から！」

あはははは－？　僕達以外の紅き翼（アラルブラ）の皆は、一瞬固まったあと、理解を諦めたね。
家以外に出せないといった覚えはないぞー、あはははは－？

そして、今回で指輪(倉庫)から何か出すのを初めて見たメンバー（アリカ姫、ラカン、テオドラ）は、
テオドラが尋問、ラカンが顎に手を当てて「ほぉ～……」何て言ってて、アリカ姫は固まってる。

それにしても、ラカンが想像よりも普通の反応でガッカリだや……。
流石に傭兵やってたら、ビックリ事には慣れてるのかなー？

「ほー、それは凄いな！　　他にも何か出せるのか！？」

おー、凄いね。

こんなにアッサリと受け入れられるなんてね。

好奇心の方が勝っちゃったのかな？

「えぇ、色々出せるわよ？」

「例えばね、これなんかどう？」

ズニュニューン！

「おぉ！」

出しました！

テーブルとイスと我が【ヒイラギ】のフルコース料理！

いや、他に喜んでもらえる物が思いつかなったよ。

「ささ、味は保証するよ、ドンと食べて下さいな！」

僕達が進めると、直(す)ぐにテーブルについて料理を食べ始めるテオドラ。

あぁ、可愛い。

何これ、満面の笑顔になりながら「こんなに美味しい物は食べた事がない！」なんて言っちゃってる。

小さい体でチョコンとしてるから凄く愛(あい)らしく感じるよ……。

うん、可愛すぎる。

「ひゃッ！？　　な、なんじゃ」

「「抱きついてる」」

いや、可愛すぎますね。

ついつい抱きついちゃった！

予想はしてたけど、皐月も同時に動き出してた。

テオドラたんから見た右側に皐月、左側に僕で、テオドラたんを挟み込む様な形になってます。

いやー、何これ！

頬っぺたがツヤツヤふにふに何だけど！？

真っ赤になりながら「は、離すのじゃ」って言ってるけど、全然力がこもってないや。

……満更でもないんだね！？

「み、劉？」

「……何？」

テオドラと抱き抱きしてたら、詠春がやって来た。

……良いとこだったのに。

「……とりあえず、この城は目立つからしまえ」

「……はーい」

……お～。

テオドラに抱きついてる事を注意しに来たのかと思ったのに、城の事か……。

よし、よく分かった。

僕達とテオドラの仲（？）　は詠春公認の仲って事で良いんだね！

もっともっと愛（め）でて良いんだね！？

「あと、そのその御方から離れろ」

「「……はい」」

＊＊＊

「さーて、姫さん。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ。連合にも帝国にも……あんたの国にも見方はいねぇ」

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で……最新の調査では、オスティアの上層部が最も【黒い】…

…という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか……」

いやー、僕達がアレだけ場を引っ掻き回したのに、何故か原作通りに事が進んでるよ。

ご都合主義って奴だね！

あはははー？

「我が騎士よ」

「だぁら、その【我が騎士】って何だよ、姫さん。クラスでいったら、俺は魔法使いだぜ？」

「もう連絡の兵ではないのじゃろ。ならば主は、最早私のものじゃ」

「な……」

……軽い告白見たいだね？

「連絡に帝国……そして、我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。じゃが……主と、主の【紅き翼（アラルブラ）】は無敵なのじゃろ？」

あー、テオドラがラカンの頭に乗って髪の毛引っ張ってる！

……羨ましいなー。

よし！

「のわ！？」

「おっと……」

僕はガトウさんに、皐月はタカミチの肩に飛びついてますよーっと。

ガトウさんは少しだけ困った顔したけど、直ぐに苦笑して、僕の足を抑えてくれました。

タカミチは真っ赤になりながら、フラフラしてる（笑）

そうだよね、皐月の方が明らかに大きいもんね、あはははー？

「世界全てが敵ーー。良い出はないか。こちらの兵はたったの９人。だが、最強の９人じゃ。ならば我等が世界を救おう。我が騎士、ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「……へ、やれやれ。相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう」

＊＊＊

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

やって来ました！

【墓守り人の宮殿】に！

え？

飛ばしすぎ？

しゃあないやん、この間の説明は２Ｐしかないんやで！？

……まぁ、色々ありましたがね。

まず、ガトウさん、タカミチ、テオドラ、ラカン、詠春と凄く仲良くなりました！

うん、凄くすごくスゴくＳＵ　ＧＯ　ＫＵ！！

まず、ガトウさんとタカミチなんだけど、僕達と一緒にいる間は常に肩に乗せて貰ってます！

ガトウとタカミチと皐月と劉が一緒にいる　＝　肩車

この方程式が成立してしまっても良いのではないかと言うほど。

タカミチのフラフラも今は既にありません。

安定感のタカミチ、馬力のガトウです！

それと、テオドラ。

あれからも、皐月といきなり一緒に抱きつき続けてたのですが。

しばらく経つと何となんと、テオドラから抱きついて来る様になりました！

……お～。

真っ赤になりながら顔を擦りスリしてくる……。

何この可愛過ぎる娘（こ）。

僕達を萌え死にさせる気！？

それと、テオドラの入浴中に僕と皐月で乱入し続けました！

……変態と言うなかれ、疚（やま）しい気持ちは微塵もナッスィン！

最初は絶叫されてましたが、今はもうテオドラが乱入して来る様になりました。

しかも、お風呂に入る時に僕達が居ると「一緒に入るのじゃ」何て言ってくるんだ……。

……お～。

ダメだよ、もう死ぬよ僕……。

あと、ラカンは成り行きでね。

テオドラのついでに仲良くなった感じだね。

でも、ラカンは原作キャラの中では物凄く大好きなのキャラなので、棚からラカン（ぼた餅）でした。

それと、詠春ですがね、やっぱり同じ日本人どうしで話が合うのですよね。

まさか、魔法世界でこたつの素晴らしさについて話し合えるとは思わなかったよ……。

それと、ラカン情報【詠春はエロに弱ぇ（笑）】を信じて、皐月と共にお風呂に突入！！

……結果は皆さんの推測でね、あはははー？

「ナギ殿！　　帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おぅ。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達

が本丸に突入できる。頼んだぜ。ま、心配すんな。劉と皐月もついてっから。こいつ等は俺よりも強い」

うん、事前に僕達は外側で戦う事を伝えてました。

皆も少しだけ考えた様子を見せましたが、意外にすんなり頷いてくれて凄く助かったんです。

「ハッ。それで、あの……ナギ殿、劉殿、皐月殿」

「「「ん？」」」

お！？

僕達のサインも貰ってくれるの！？

やったね、何気に1つの目標だったからね。

「ササ、サインをお願い出来ないでしょうか」

「おあ？　　ああ、いいぜ。それくらい」

「良いよぉー」

「えぇ、良いわよ」

「あと、劉殿、皐月殿のサインには【ロンへ】と書いてあげてくれませんか？」

「へ？　セラスさんのじゃ無かったの？」

「ええ、私はどうでも良かったのですが、ロンがどうしてもと私に頼む物ですから……」

「……イエッサー」

＊＊＊

「連合の正規軍の説得は、間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることは出来ないか？」

セラスさんの言葉に打ちひしがれている時にガトウさんから連絡が来ました！

いやー、画面越しでもやっぱり渋いなー、アダルトだなー、ダンディーだなぁ！！

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……【世界を無に帰す儀式】を。世界の鍵【黄昏の姫御子】は今、彼等の手にあるのです」

「ああ。よぉしっ、野郎ども、行くぜ！！」

よぉしっ、始めよう！

取り合えず、皆の後方からは規模の大きな魔法なんかは使えるはずが無いから、皆の少し前に出て大きな呪文を叩きつけよう！

「皐月！」

「えぇ！」

「魔法の射手　光の１矢」
「魔法の射手　闇の１矢」

ズドォォォォォン！！！！！

あはははは－？

やり過ぎた……。

半径２５ｍ程はあるだろう極太の円形の魔法の射手のビームが周りの召喚魔と自動人形を駆逐しちゃいましたね……。

いや、まだたっぷり居るんですが、魔法の射手でここまでやった事は無かったんですよね。

いやー、これでも結構加減したんだけどもねぇ～。

あぁ、やっぱり。

混成部隊の皆が固まっちゃってるや……。

それに比べて、流石に紅き翼（アラルブラ）は多少の驚きじゃ止まらないね。

表情こそ驚いてはいるけど、速度は一切緩んでいない。

「道は開けたわよ！」

「さっさと終わらせちゃえ！！」

「おう！　行ってくるぜ！！」

＊＊＊

さて、行ったね。

よし、後はもう面倒だし、一気に片付けちゃおう！

それにしても、相手が死ぬ事を考えなくていいのは楽で良いね。

召喚魔は致死のダメージを与えてもあちらに強制送還されるだけだし、自動人形なんてもともと生きてないし。

さぁ、皆には下がって貰おう。

「皆、僕達の後ろに下がって！！」

やっぱり、皆戸惑ってるなぁー。

でも、出来るだけ被害も抑えたいし、駄目押しを。

「早く！！！」

流石に何かある事は気づいた様で、ゾロゾロと下がっていく混成部隊の皆。

だが、相手もそれを簡単に許す訳が無く、後ろ向きになった人達に攻撃を仕掛ける。

しかし、それを劉と皐月が許さない。

危ない所には、小さめの魔法の射手（劉・皐月基準）を放ち、援護する。

相手をする事が精一杯で後退が出来ないところに1発。
後退の途中、背後からの攻撃に気づけて居ないところに1発。
負傷した仲間を背負って居るために、上手く動く事が出来ないで居るところに1発。
そんな事を繰り返して6分が経過した頃、全ての混成部隊の人が2人の背後に移動していた。

「さ、思いっきり行こう！　皐月！」
「えぇ！」

「魔法の射手　闇の１５０矢」
「魔法の射手　光の１５０矢」

先程、僕達がぶっ放した極太の魔法の射手が合計で３００発が発射された。

あぁ～、もうね、面だね。
隙間が無いの。
うん、よける事はもう不可能だね。
相手の皆様には同情します。
……。

……うん、全滅？

あ、因(ちな)みに光が皐月で闇が僕ね。

「終わったね」

「えぇ」

「何処で休ませて貰う？」

「……決まってるじゃない？」

「だよね？」

＊＊＊

「のわッ！？」

「ひゃッ！？」

「「こんにちわー」」

やって来ました！

タカミチとテオドラのいる戦艦に転移使って一瞬で。

皐月はタカミチの肩の上に、僕はテオドラに抱きついて。

いや、ここしかないよね。

こんなに愛くるしいのが2人も居るんだから！

可愛いなぁー、もう。

ビックリした時の2人はもう信じられないくらい可愛い。

「お、驚かさないで下さいよ、2人共……」

「そ、そうじゃぞ！　寿命が縮んだかと思ったぞ」

「大丈夫、大丈夫！　ヘラス族なんて多少縮んでもあってない様な物だから？」

「本気で帰すのか……」

＊＊＊

あの後、タカミチとテオドラにちょっかいを出しながら、戦艦で休ませて貰ったんだけど、急に【墓守り人の宮殿】が強く発光しだしました。

うん、【世界を無に帰す儀式】が発動したんだけど、皆の力で抑えました。

僕達はテオドラとタカミチの後ろでずっと眺めてました。

ひかりがとってもきれいだた。

かんどうした。

……いやでも、真面目な話、普段は敵対しているもの同士が同じ目標のために力を合わせる事ってスゴく良いよね！

割と本気で感動してた。

＊＊＊

事後報告。

紅き翼（アラルブラ）の表彰式当日【ヒイラギ】にて、柊劉・柊皐月両名の死体が発見される。

死体には一切の外傷が無く、死因は最後まで不明となった。

8話　チーン（後書き）

2人の死に深い理由は御座いません。

死と行っても、まだ2人はバリバリの現役です。

マクギルたんは地球で隠居生活しています。

幕間？　閑話？（前書き）

この長さなら、凄く気楽に出来るね

皐月「そうね、２０分位で出来たわね」

劉「すらすらと書けてたしね」

うん、むしろ前書き後書きで苦しんでる……

「……書かなきゃ良いじゃない。強制じゃないのよ？」

……ないと寂しくない？

僕さみしい人

「あ～、それは分かるね」

「じゃ、苦しむしか無いわね」

……そっすね

幕間？　閑話？

「いやー、驚いた！　流石に自分自身の力で転生するなんて荒業をやっちまうなんて思わなかった！！　いや、お前等はかなり格の高い神だから余裕だけどな！！！」

「お久しぶりね、髭じじい」

「よくも、僕達の５８０年幸せ退屈ライフをふいにしてくれたね」

「おー……そんな怖い顔をしないでくれよ。またトイレにこもるのはごめんだぜ！！？？」

辺りは見渡す限りの景色全てが白で、それ以外の色素は劉と皐月、ゼウス以外には存在もせず、しかし、目がチカチカしだす事もない不思議な空間だった。

足元に注目すると、まるで雲の上に立っていると錯覚する程に柔らかく、そしてトランポリンの様な弾力も合わせ持っており、爪先（つまさき）に軽く力を入れるだけで、驚く位に高い所まで緩やかに登っていく。

……ここは、１度劉と皐月が転生した時にやって来た所である。

「冗談よね？　あれだけの事をしておいて、謝罪もなしに何故そ

んな事を言ってられるのかしら？」

「ごめんだぜ！！」

……何でこの人謝る時必ず「ごめんだぜ！！」になるんだろうね。

不思議だよ？

言葉だけ見ると、こんなに謝る気はなさそうなのに、ゼウス本人を見ると汗をだくだく垂れ流して必死に土下座してるの。

こんなにモフモフしてる地面（？）に頭を思いっきりつけてるから、少しだけ頭が埋まってるねんだよ？

ここまで必死なゼウスは初めて見た。

もしかしたら、神様って苦痛に凄く弱いのかもね。

罰も練りわさび72時間で済ませてたし、あながち間違いでも無いかも。

「……まぁ、良いわ。許してあげる」

あはははー？

皐月も酷いなぁー。

本当はあまり怒って無いくせにねぇ～。
形だけでも怒って見せてるんだねぇ。
ま、少しだけスッキリしたけどね。

「おー！？　サンキューだぜ！！　Ｍｙ　Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ！！！」

「ったく、調子良いんだから……」

「まぁ、良いじゃない。それで、ゼウスは何しに来たの？」

「いやいや！？　お前等がいきなり死んだらそりゃ来るだろ！？！？　それ聞いた時は驚き過ぎて【ドラ○エ９】の通信プレイに全然集中出来なかったぜ！？！？！？　やめてくれよ、今赤のオーブが必要なんだよ！？！？！？！？」

「懐かしいわね、私賢者だっけど、あなたは？」

「ついでに、僕パラディンね」

「スーパースター！！」

「フフ、ゼウスっぽいわね」

＊＊＊

「ほんで！　これから、どすんだ！？」
「柊劉・皐月のまま、未来に転生する」
「ただ、名前は親につけてもらうから、変わるだろうけど、柊の性も名乗るわ」
「なるほどな！　あー、何処に産まれるとか決めてるのか！？」
「原作キャラに関われる所に完全ランダムで行くよ」
「誰も彼も魅力的なのよね」
「ただ、ネギは除外」
「？　ネギが嫌いか！？」
「全然。むしろ素直で良い子じゃない」
「ただ、ネギに関わるのは、原作開始時が面白いと思ってね」
「なるほどな！」
「でも、アスナ以外のフラグはブレイクしたいな。どうせ、くっつけないだろうし」
「ん？　それじゃ自分に建てるのか！？」

「いや、それをする予定は無いかな。……予定外はあり得ちゃいそうだけど」

「……その言葉はフラグだぜ！？」

「クスクス、ま、なる様になるんじゃ無いかしら？」

「……そうだな！！」

「それじゃ、そろそろ行くよ」

「おう、またな！」

そこで、僕達の意識は無くなった。

幕間？　閑話？（後書き）

マクギル「お～、この世界のタタミとは素晴らしい物だな」

劉「でしょ？　独特の臭いが凄く落ち着くんだ」

「更に、この電子レンジと言うのも素晴らしい。魔法の無い世界は不便と思ったが、その変わりに文明が発展しているのだな」

ブ～ン……

皐月「今も何か温めてるわね」

「卵を温めておったのだよ。いやいや、まだフライパンと言うのを買ってきていないのでな」

「「え！？」」

「ん？　どうかしたのk……

パーン！！

「あはははは！……」

「言っておくべきだっわね……」

「NO～！？　電子レンジの中が！？」

「「手伝うよ、おじいちゃん」」

「お～、ありがとう。ミーくん、さっちゃん……」

「「気にしないで」」

ほのぼの

9話　あなたもか……いや、嬉しいけど……（前書き）

ゼウス「そういや、お前等何回か過去にとんで、何かやってた見たいだが、何やってたんだ？」

もと皐月「エヴァ関連で1回、タカミチ・ガトウさん関連で1回、アリカ姫関連で1回、後はちょろちょろと遊びに行ったりね」

「内容は聞かない方が良いのか？」

もと劉「いや、どっちでも良いかな？」

「えぇ、言っても良いけど、聞く？」

「いや、止めとく」

「あ、そぅ」

「何で？」

「……皐月の顔が聞くなって言ってるから」

「あぁ、本当だ。これ、威圧してる顔だ」

「凄いよな、顔芸を綺麗なままで出来るのって」

「……顔芸？」

「……ゼウス？　皐月がプルプル言ってるんだけど？」

「奇遇だな……俺もそう見える。しかも、顔には殺すって書いてるぜ？」

「皐月顔芸大っ嫌いだもんね……」

「……逃げた方がいい？」

「全力で」

ピュン！

「あ、行った」

ビョウ！！

「あ、捕まった……あ……あぁ……あ～ぁ……」

「……」

「南無阿弥陀仏……南無阿弥陀仏……」

9話　あなたもか……いや、嬉しいけど……

「おはよう」

「おはよう」

おはよう！

もと劉です！

……いや、今も劉と名乗ろうと思えば名乗れますが、もっと面白いタイミングがあると思うので、今は黙って現在の名前を使う事にしています。

因(ちな)みに、現在は5歳でーす。

ちゃんと、もと皐月とも双子だし、見た目は依然と一緒です。

いやね、双子と容姿は流石に変えたく無かったから、転生する時に設定しました。

やっぱり、愛着って沸くよね。

「……」

「……」

…もと皐月に目配せをして、下に行こうよ（２人の寝室は２階）の合図。

…もと皐月は軽く微笑んで上半身を起こす。

……お～。

ピンクのフリフリパジャマが　ｖｅｒｙ　ｃｕｔｅ……。

……少し前から、僕が変態キャラになってきてる気がする。

……気にしたら負けだね、…もと皐月も僕と同じ思考で同じ行動をとってるから、良いよね。

あれ、じゃぁ、…もと皐月も変態？

……いやいや、変態を前提に置いちゃ駄目だ。

可愛いモノを素直に可愛いと思える素直なだけだよね、うん。

……いやでも、冗談抜きで変態とは違うと思う。

だって、可愛いモノは可愛いんだもん。

＊＊＊

「おはよーう」
「おはよう」

台所で朝ごはんを作ってる母親と、テーブルに座って新聞を読んでいる父親に挨拶をする。

うん、普通の家庭って感じで良いね。

前の父さんと母さんは超のつく有名人だったから、朝起きて家族勢ぞろいなんてのは凄くレアな事だったからね、少し嬉しいんだ。

「あら、おはよう。紫苑（しおん）、柚（ゆず）」

「おはよう、2人共」

やっとこさ説明出来ますね。

紫苑に柚。

そうです、僕達の名前です！

紫苑って名前が僕で、柚がもと皐月。

2人とも、植物を由来にしたみたいですね。

中々にお気に入りです。

それと、性の事なのですが、これが問題。

天神(あまがみ)……。

マジパネェんすけど……。

悪意感じね？

てか、ゼウスじゃね？

「あいつ等神だし、苗字に神入れちまえ！」なんて言ってるあいつがマジ想像出来んだけど。

あいつ、十中八九僕等の転生少し弄(いじ)くってるんすけど……。

てか、それだけじゃねぇし。

明らかにあいつの遊び心が僕等の両親に施されてんすけど。

……心なしか、口調がチャラくなってた気がするけど、NOタッチで。

「今日は遊びに行くと行っていたが、何処に行くんだ？」

「あぁ、今日も隣に行ってくるよ」

「あら、また佐倉さんの所？」

「えぇ」

「相変わらず、仲が良いんだな」
「うん、愛衣(めい)ちゃん大好きだもん」
「あらあら、うふふ」

＊＊＊

ピンポーン……ピンポーン……。

「はーい。あら、紫苑君に柚ちゃん。いらっしゃい、愛衣(めい)なら部屋で2人の事待ってたわよ」
「ありがとう、おじゃましまーす！」
「おじゃまします」
「はい、ゆっくりしていってね」

……子供のふり、なかなか板についてるでしょ？
何だかんだ、子供は無邪気でいれるから楽しいしね。
あと、佐倉愛衣……。

もう気付いてるよね？

「愛衣ちゃ～ん！　？来たよー！」

「紫苑君？　？今出るね～！」

扉の前で軽く声を掛けて上げると、愛衣ちゃんの可愛らしい声が聞こえて来た。

楽しみにしてくれてたのか、声は少しだけウキウキしてる様に感じる。

うん、嬉しいよね、自分と遊ぶ事を楽しみにしてくれてるって。

でも、何だろうね。

遊びといっても、何する訳じゃないから、その日あった事とかを何となく話し合ってるだけなのにね。

まだ、幼稚園に入ったばかりの愛衣ちゃんが、ただお話しするだけで楽しんでるとは思いにくいんだよね。

……あ、ついでに愛衣ちゃんは１つ年下で４歳ね。

だから、１度聞いた事あるんだけど「お話しするだけで、良いの？　？積み木とかで遊びたいんじゃ無い？」て、聞いたら「紫苑君と柚ちゃんなら、お話しするだけで凄く楽しいの」って、満面の笑み

で帰ってきた。

……すぐ抱きしめた、２人で。

「あ、おはよう！　？紫苑君、柚ちゃん！」

ヒマワリさえ霞むんじゃないかって程の笑顔で僕達に飛びついて来た女の子。

佐倉愛衣ちゃん。

あの子だよ、あの子。

いつも、高音・Ｄ・グッドマンと一緒にいた、魔法生徒の１人。

うん、あの脱げ女さん（笑）を、お姉様って慕ってた娘（こ）。

いや、原作に絡むキャラと会える様に設定して、完全ランダムに転生したら、佐倉さんのお隣さんになっちゃった。

嬉しいんだよ？

ただ、予想外過ぎて正直に言ってしまうと、この娘の事は微塵も頭に無かったんだよね。

初めて会った時は、原作キャラって気付かなかったもん。

しばらく遊んでるうちに、成長して顔立ちがある程度決まって来て

気付いたの。

いや、ビックリした。

……うん、ビックリした。

それにしても、何だろうね？

ちっちゃい娘って、抱きつくのを繰り返すと向こうから抱きついて来る様になる生き物なんだろうか……。

最初は恥ずかしがってたのに、今はもう猪突猛進に抱きつ(突っ込んで)いて来る様になってしまった……。

テオドラの二の舞じゃなひか。

いや、嫌じゃないんだよ？

むしろ、嬉しいんだよ？

ただ、少し控えたほうが良いんだろうか……。

軽い洗脳の様な錯覚が最近してるの……。

「さ、入って」

……抱きついたまま、引っ張るのは止めて下さい……。

別に駄目な事ではないのは分かっているのですが、訳の分からない罪悪感がやって来るんです……。

いや、本当に何で？

悪い事じゃないんだよ……本当に何で？

……よし、もう考えない。

＊＊＊

「昨日幼稚園でね……君が滑り台から……で、病院に運ばれ……心配でお見舞いに……ただの下半身不随……看護師さんが心配するなって……で、安心してお家に帰っ……君の怪我が治ったらまた、一緒に鬼ごっ……約束したんだぁ～。それとそれと、今日の朝にパ……スーツから香水と口紅のあｔ……ママが凄く怒っ……今、遠いところに行ってて……しばらく会え……でも、パパもお仕事だから、仕方が無……」

……重いよ。

看護師さんは確実に心の傷を１つ作ったね……致死性の。

それと、何やってんのパパさん……。

離婚とかしてしまったら、この家に滅茶苦茶きにくくなってしまうのですが……。

居心地良いんだから、そんな事には絶対なって欲しくないんだけども……。

……今思えば、さっきのママさん少しだけ元気がなかった様な気もする様なしないような……。

……よし、これも考えない。

～♪～～♪～～♪～～♪～～♪～～……。

「ーーあ」

この辺りは、夜の6時になると街中に音楽が鳴り響くようになっていて、それを合図に僕たちはこの家から帰る様にしている。

幼稚園児にしては遅い時間だとも思うけど、お隣さんだから良いやって言う軽いノリでこの時間まで許されているんだ。

まぁ、帰りには佐倉ママさんが一緒に来てくれるし、遅い時はもっと遅い時間まで居るから、僕達から言わすと6時でも早い方何だけどね。

それに、何度佐倉家にお泊りしたか分からない位だし。

「6時ね……」
「そろそろ帰らなきゃ」
「ねぇ、今日は泊まっていかないの？」
……止めて下さい、小悪魔の誘惑。
「泊まる！」って、言いたくなるから。
「……ご、ごめんね。今日は帰るよ」
「……分かった。じゃあ、明日も遊ぼうね！」
「えぇ、明日は愛衣ちゃんがいらっしゃい？」
「うん！」

幼稚園児にしては凄く物分りが良いんだよね。
流石に、将来は若年でありながら無詠唱呪文を使いこなす秀才だね。
偉い娘ちゃんには、柚と一緒に抱きついて頭をなでなでしてあげなきゃね。
……決して、おねだりが可愛過ぎたとか、そんな理由では無い。

＊＊＊

「たしか、愛衣ちゃんって、アメリカのジェイソンだかジャクソンだかって言う魔法学校に留学しちゃうよね？」

「えぇ、ただ、留学期間で詳しい話は無いから、いつ頃行っちゃうのかは分からないけどね」

「うーん、考えてもしょうがないか……」

「そうね、こんな事考えて答えが出るものでは無いし」

でも、やっぱり寂しいよねぇー。

正直、愛衣ちゃんと離ればなれになっちゃったら、僕達に友達居ないんだよね。

いや、幼稚園に通ってはいるけど、遊べる仲って言うのは愛衣ちゃんだけ。

それに、元々寝てれば幸せな僕達に暇なんてものは存在しないけども、寂しさは別だよね。

いくら、幼稚園児で精神年齢的に合わないって言ったって、たまに一緒に居るなら凄く良いものだし。

……可愛いし。

頑張って友達を作っといた方が良いかな……。

……よし、これもｋ（ｒｙ

……あ、そうだ。

重要報告。

普段は認識障害で他人には絶対に見えてませんが、僕の頭には狼の黒い耳が、背中には鳥の白い翼が生えていて、柚の頭には狼の白い耳が、背中には鳥の黒い翼が生えています。

9話　あなたもか……いや、嬉しいけど……（後書き）

紫苑「そういえば、いつかは名前戻るのかな？」

いつかは戻すよ。

あくまで、これは一時的な物だよー。

楓「今度の名前はどう決めたのかしら？」

それぞれ、知り合いの名前を使わせて貰ったよ。

「なるほど……紫苑って名前が近くに居るって珍しくない？」

そうだね、僕も初めて聞いた時、少し驚いた。

「何てハイカラな名前だべか」って。

その点、楓は結構居るね

「何でかしら、そういう言い方されると妙に負けた気になるわ……」

＊＊＊

当初、名前は楓だったのですが、ひじょ～～～にアホな事に【長瀬楓】様を忘れておりまして、名前がかぶっていました。

すぐに名前を柚に修正しましたので、この後書きだけ名前が楓になっておりますが、今回限りですので「アホな作者だなー」と、罵ってくださると、ボタンは泣いて悲しみます。

……楓姉は好きなキャラだったのに、ど忘れしてしまうとは……。

これからは、この様な事が無い様に気をつけます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6431t/

双子 in ネギま

2011年8月18日08時47分発行